志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（15）

原田古墳

（原田古墳群　第１分冊）

２０２２年３月

鹿児島県志布志市教育委員会

序　　文

本書は、保存目的に伴い、平成24～27年度、令和元・2年度に確認調査を実施した、志布志市有明町原田に所在する原田古墳の発掘調査報告書です。

原田古墳は、直径が約40ｍを超える円墳とされてきましたが、構築年代や埋葬施設などが不明なままでした。

調査の結果、正確な規模が判明しました。また、大規模な盗掘を受けていたものの、竪穴式石室の可能性が高いことがわかりました。そして、広域流通品である須恵器も見つかり、その須恵器から5世紀中頃に造られたことが想定できました。

このように、多くのことを明らかにすることができ、古墳時代の志布志の歴史を考える上で重要な成果となりました。

本書が市民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、地域の歴史や文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財の普及啓発の一助となれば幸いです。

今回の調査にあたり鹿児島国際大学の大西智和先生と鐘ヶ江賢二先生には、現場での作業から報告書作成に至るまで多くの御支援・御指導いただきました。厚く御礼申し上げます。

また、地権者様や鹿児島県教育委員会等の関係各機関ならびに発掘調査や整理・報告書作成に従事・協力していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

令和４年３月

志布志市教育委員会
教育長　福田　裕生

例　言

1　本書は、農道工事中の不時発見に伴い調査を実施した原田２・３号地下式横穴墓の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は、鹿児島県志布志市有明町原田字大塚に所在する。

3　発掘調査は、平成24～27年度、令和元・２年度に、志布志市教育委員会を主体として実施した。平成24～27年度調査は市費で、令和元・２年度調査は文化庁の国庫補助事業を用いて実施している。

4　整理作業・報告書作成は、令和３年度に志布志市埋蔵文化財センターにおいて実施した。文化庁の国庫補助事業を用いている。

5　発掘調査及び報告書作成において、鹿児島国際大学の大西智和氏と鐘ヶ江賢二氏の支援・指導を得た。

6　本書で用いた座標やレベル値は、平成23年度に大西智和氏らが実施した測量調査時に設定した座標を用いている。

7　掲載遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致する。

8　遺物注記で用いた遺跡略号は、「原田」・「ハラダ」である。

9　挿図の縮尺は、各図面に示した。

10　遺跡位置図等の地図は、国土地理院発行の1：25,000地形図『志布志』・『持留』、1：50,000地形図『志布志』・『鹿屋』、大日本帝国陸地測量部発行の1：50,000地形図（明治35年測量）、そして志布志市役所発行の『志布志市全図』を利用した。

11　発掘調査における図面作成は、相美、大西氏（鹿児島国際大学）及び調査参加の学生が行った。

12　発掘調査における写真撮影は、相美と大西氏が行った。本書に掲載した写真は、大西氏が撮影したものである。

13　本書に掲載した航空写真の一部は、平成23年度に志布志市教育委員会が株式会社ふじたに委託し、撮影したものを使用した。

14　原田古墳やその周辺の地下レーダー探査を中村直子氏（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター）に実施していただき、その報告を賜った。

15　遺構図作成作業は、鐘ヶ江氏が行った。遺物の実測・トレース作業は、相美が行った。

16　土層と遺物の色調は、『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局）に準拠している。

17　遺物の写真撮影は、市埋蔵文化財センターにおいて牛嶋茂氏（写測エンジニアリング株式会社）が、そして鹿児島県立埋蔵文化財センターにおいて西園勝彦氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）が行った。

18　出土したガラス玉について、鹿児島県立埋蔵文化財センター分析室において蛍光Ｘ線分析などを実施していただき、その報告を賜った。

19　出土した砂岩と溶結凝灰岩について、鐘ヶ江氏らに分析を実施していただき、その報告を賜った。

20　有明町馬場地下式横穴墓出土鉄製品の実測図は河口貞徳氏により作成されており、現在鹿児島県立埋蔵文化財センターに「河口コレクション」として所蔵されている。今回、鹿児島県立埋蔵文化財センターのご厚意により、トレース図の掲載の許可を受けた。

21　本書の編集は相美・鐘ヶ江氏・大西氏が担当し、執筆・編集の分担は、以下のとおりである。

第１章　相美
第２章　相美
第３章　相美
第４章
　第１節　鐘ヶ江・大西
　第２節　相美
第５章　相美（編集）
第６章　鐘ヶ江・大西
第７章　相美
写真図版　相美（編集）

22　出土遺物及び図面・写真の記録類は志布志市教育委員会で保管し、展示・活用する予定である。

総目次

【第一分冊】
序文
例言
目次
第１章　調査の経過
第２章　遺跡の位置と環境
第３章　調査の方法
第４章　調査の成果
第５章　分析
第６章　考察
第７章　小結
写真図版
報告書抄録

【第二分冊】
序文
例言
目次
第１章　調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経過
　第２節　調査
　第３節　整理・報告書作成作業
　第４節　調査後の成果紹介
第２章　調査の成果
　第１節　調査の概要
　第２節　２号地下式横穴墓
　第３節　３号地下式横穴墓
第３章　分析
　第１節　３号地下式横穴墓の人骨について
　第２節　３号地下式横穴墓出土の赤色顔料について
　第３節　３号地下式横穴墓出土遺物の理化学調査
　第４節　原田３号地下式横穴墓出土石材の検討
第４章　考察
第５章　小結
第６章　総括
写真図版
報告書抄録

本文目次

序文
例言
目次
第１章　調査の経過…… 1
　第１節　調査に至るまでの経過…… 1
　第２節　発掘調査…… 1
　第３節　整理・報告書作成作業…… 4
　第４節　調査後の成果紹介…… 5
第２章　遺跡の位置と環境…… 7
　第１節　地理的環境…… 7
　第２節　歴史的環境…… 7
　第３節　志布志市内の古墳の概要…… 10
　第４節　原田古墳群について…… 19
第３章　調査の方法…… 24
　第１節　発掘調査の方法…… 24
　第２節　層位…… 24
第４章　調査の成果…… 25
　第１節　遺構…… 25
　第２節　遺物…… 48
第５章　分析…… 54
　第１節　原田古墳周辺の地中レーダー探査結果…… 54
　第２節　原田古墳出土のガラス小玉について…… 58
　第３節　原田古墳出土石材の検討…… 61
第６章　考察…… 66
第７章　小結…… 70
写真図版
報告書抄録

挿図・表目次

第１図　遺跡位置…… 6
第２図　周辺遺跡…… 8
第３図　周辺環境の変遷…… 8
第４図　市内の古墳…… 11
第５図　飯盛山古墳関係資料…… 12
第６図　小牧１号墳関係資料…… 14
第７図　京ノ峯１～６号地下式横穴墓…… 16
第８図　京ノ峯７～９号地下式横穴墓…… 17
第９図　馬場地下式横穴墓群出土遺物…… 18
第10図　春日堀地下式横穴墓…… 18
第11図　安良地下式横穴墓…… 18
第12図　六月坂横穴墓出土遺物…… 19
第13図　原田１号地下式横穴墓関係資料…… 21
第14図　原田古墳群周辺航空写真（１）…… 22
第15図　原田古墳群周辺航空写真（２）…… 23
第16図　原田古墳測量図…… 26
第17図　トレンチ配置図…… 27
第18－１図　１トレンチ墳丘上位　平面・土層図…… 29
第18－２図　１トレンチ墳丘中位　平面・土層図…… 30
第18－３図　１トレンチ墳丘下位　平面・土層図…… 31
第19－１図　４トレンチ墳丘下位　平面・土層図…… 32
第19－２図　４トレンチ墳丘上位　平面・土層図…… 33
第20図　７トレンチ　平面・土層図…… 34
第21図　８トレンチ　平面・土層図…… 34
第22図　９トレンチ　平面・土層図…… 35
第23図　11トレンチ　平面・土層図…… 36
第24図　３次調査(2015年)時点での
　　墳頂部トレンチ設定と遺物出土状況…… 38
第25図　６次調査(2021年)時点での
　　墳頂部トレンチ設定と遺物出土状況…… 39
第26図　主体部石材等検出状況…… 40
第27図　３トレンチ　平面・土層図…… 41
第28図　５トレンチ　平面・土層図…… 42
第29図　６トレンチ　平面・土層図…… 43
第30図　10トレンチ及び主体部床面断面図…… 44
第31図　12トレンチ　平面・土層図…… 45
第32図　13トレンチ　平面・土層図…… 46
第33図　墳頂部出土大型石材（№１～３・５）…… 47
第34図　墳頂部出土大型石材（№４）…… 48
第35図　想定される墓壙の範囲…… 49
第36図　出土遺物（１）…… 50
第37図　出土遺物（２）…… 51
第38図　出土遺物（３）…… 52
第39図　平面反応スライス図…… 55
第40図　GridＯ断面反応図…… 56
第41図　Grid１・２断面反応図…… 57
第42図　Grid３断面反応図…… 58
第43図　ガラス小玉分析結果…… 59
第44図　ガラス小玉顕微鏡写真…… 60
第45図　溶結凝灰岩H-1、H-2の薄片と
　　Ｘ線分析顕微鏡の測定エリア…… 62
第46図　H-1のBSE像とSEM像
　　および測定ポイント…… 63
第47図　H-1火山ガラスの屈折率 …… 64
第48図　H-1斜方輝石の屈折率 …… 64
第49図　原田古墳(左)と志布志市岳野山(右)
　　採取砂岩の偏光顕微鏡写真…… 64
第50図　原田古墳・夏井海岸・岳野山の位置と
　　志布志市域の地質…… 65
第51図　原田古墳墳丘想定図…… 66
第52図　原田古墳墳丘構築手順想定図…… 68
第53図　唐仁大塚古墳の石棺と天井石…… 69
第54図　肝属平野周辺域における首長墓系譜…… 70

第１表　周辺遺跡地名表…… 5
第２表　Ｘ線分析顕微鏡による測定エリア分析結果… 62
第３表　EPMAによるH-1の火山ガラスの化学組成 …… 63

写真図版目次

図版１　古墳遠景
図版２　古墳遠景
図版３
　１．古墳遠景（東から高隈山系をのぞむ）
　２．古墳近景（南西から）
図版４
　１．古墳近景（西から）
　２．古墳俯瞰
図版５
　１．古墳東裾（南から）
　２．古墳北裾（北東から）
　３．古墳北裾（西から）
　４．古墳西裾（北から）
　５．古墳南西裾（南から）
　６．張り出し部（東から）
　７．調査前墳頂部（北から）
　８．墳頂部露出石材
図版６　１トレンチ
　１．完掘状況（南から）
　２．完掘状況（南西から）
　３．完掘状況（北から）
図版７　１トレンチ
　１．上部東壁断面
　２．中部東壁断面
　３．裾部付近東壁断面
　４．張り出し部付近東壁断面
　５．下部段形成部東壁断面
　６．下部段形成部（南から）
　７．下部東壁断面
　８．最下部東壁断面
図版８
　１．２トレンチ完掘状況（南から）
　２．２トレンチ完掘状況（北から）
　３．３・５・６トレンチ位置
図版９
　１．３トレンチ盗掘坑検出状況（北から）
　２．３トレンチ盗掘坑検出状況（南から）
　３．３トレンチ内大型石材（西から）
　４．６トレンチ盗掘坑検出状況（西から）
　５．３トレンチ４次調査時状況（南から）
図版10
　１．６トレンチ北壁断面（南東から）
　２．６トレンチ西側北壁断面（南から）
　３．６トレンチ北壁断面（南から）
　４．３トレンチ西壁断面
　５．３トレンチ中央西壁断面（南から）
　６．３トレンチ中央西壁断面
　７．３トレンチ南側西壁断面
図版11
　１．３トレンチ墓壙ライン
　２．３トレンチ盗掘坑内廃棄礫
　３．３トレンチ北側石室石材
　４．３トレンチ中央側石室石材
　５．３トレンチ南側石室石材
　６．10トレンチ盗掘坑検出状況（東から）
　７．10トレンチ東壁断面
　８．10トレンチ墓壙ライン
図版12
　１．５トレンチ完掘状況（西から）
　２．５トレンチ北壁断面
　３．13トレンチ盗掘坑検出状況（南から）
　４．13トレンチ東壁断面
　５．12トレンチ南壁断面
　６．８トレンチ完掘状況（南西から）
　７．８トレンチ北壁断面
図版13
　１．４トレンチ完掘状況（北から）
　２．４トレンチ段屈曲部（南から）
　３．７トレンチ完掘状況（西から）
　４．７トレンチ東壁断面
　５．11トレンチ完掘状況（東から）
　６．11トレンチ東壁断面
図版14
　１．９トレンチ完掘状況（西から）
　２．９トレンチ北壁
　３．大型石材４
　４．大型石材５
　５．大型石材２
　６．大型石材３
　７．盗掘坑内出土砂岩製石材
　８．盗掘坑内出土凝灰岩製石材
図版15　出土遺物（須恵器）
図版16　出土遺物（古墳時代土師器、古代土師器など）

第１章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

市指定の史跡である原田古墳は、以前より県内最大級の円墳とされてきたが、詳細な測量調査は行われておらず、また構築年代などの情報も不明なままであった。

平成22・23年度に、鹿児島国際大学の大西智和教授が中心となって測量調査が実施された。その結果、直径40ｍを超える墳丘を有すること、南西部に三角形状の張り出し部が存在することが判明した。

その一方で、正確な墳形や規模の把握、周濠の有無、埴輪や葺石の有無、埋葬施設の現状の把握など、多くの課題も残った。

このような課題を解明し、将来的に県指定史跡を目指す際の資料を得る目的のために、志布志市教育委員会(以下、市教委）は、大西教授の協力・指導を受けながら、保存目的の確認測査を実施することにした。

発掘調査は、平成24～27年度、令和元・２年度の６回実施した。なお、平成24～27年度は、市単独予算で実施した。令和元・２年度は、文化庁の国庫補助事業を利用し、市内遺跡発掘調査等事業として実施した。

第２節　発掘調査

調査は平成24～27年度、令和元・２年度に実施した。各年度の調査体制及び調査の具体的経過は、以下のとおりである。

調査体制（平成24年度）

調査主体　志布志市教育委員会
調査責任者　志布志市教育委員会

		教　育　長	坪田　勝秀
調査事務局	〃	生涯学習課長	榊山　弘昭
	〃	文化財管理室長	竹田　孝志
	〃	埋蔵文化財係長	上田　義明
	〃	主任主査	大窪　祥晃
調査担当	〃	主任主査	相美伊久雄

調査指導　鹿児島国際大学　国際文化学部
教　授　大西　智和
調査協力　鹿児島大学埋蔵文化財調査室
教　授　中村　直子
調査参加者　鹿児島国際大学学生、鹿児島大学学生

調査の具体的経過

平成24年度の調査は、平成25年２月12日から２月22日まで実施した（実働10日）。調査表面積は34㎡である。

（２月11・12日）

墳丘の構築法や張り出し部の構造を確認するために、墳頂南側端部から張り出し端部に１トレンチ設定、掘り下げ。

（２月13日）

１トレンチ掘り下げ。中村直子氏による古墳周囲の地下レーダー探査。

（２月14日）

１トレンチ南側へ拡張。

墳丘端部や周濠の有無の確認のために２トレンチを設定、掘り下げ。

（２月15・16日）

１・２トレンチ掘り下げ。

（２月17日）

１・２トレンチに下層確認のためのサブトレンチを設定、掘り下げ。

１トレンチ南側は掘り下げ終了、清掃、写真撮影。
２トレンチ掘り下げ終了、測量。

（２月18・19日）

雨天中止。19日に橋本達也氏（鹿児島大学総合研究博物館）見学。

（２月20日）

１トレンチ土層観察、測量。

（２月21日）

１トレンチ南側の土層断面図作成。２トレンチの土層断面図作成。内村憲和氏（大崎町教育委員会）見学。

（２月22日）

１トレンチ清掃、写真撮影。中村直子氏による墳頂部の地下レーダー探査。１・２トレンチ埋め戻し。現場撤収作業。

調査終了後、「発掘調査実施報告書」（平成25年２月26日付）を県教育委員会に提出し、発掘調査に係る手続きを実施した。

調査体制（平成25年度）

調査主体　志布志市教育委員会
調査責任者　志布志市教育委員会

		教　育　長	坪田　勝秀
調査事務局	〃	生涯学習課長	榊山　弘昭
	〃	文化財管理室長	竹田　孝志
	〃	埋蔵文化財係長	上田　義明
	〃	主任主査	大窪　祥晃
調査担当	〃	主任主査	相美伊久雄

発掘調査の実施にあたり、鹿児島国際大学の大西智和教授へ調査支援業務の委託を実施した。なお、市教委職員1名が現場に常駐し、調査現場の監理を行った。

調査支援委託先　鹿児島国際大学　国際文化学部
教　授　大西　智和

調査の具体的経過

平成25年度の調査は、平成26年2月11日から2月22日まで実施した（実働10日）。調査表面積は42㎡である。

（2月11日）

1トレンチ復元作業。

（2月12日）

1トレンチを北側へ拡張、掘り下げ。

墳丘の構造や埋葬施設についての手掛かりを得るために、墳頂平坦面に3トレンチを設定、掘り下げ。

墳丘構築法や墳丘端部の手掛かりを得るために、墳丘北斜面に4トレンチを設定、掘り下げ。

（2月13日）

雨天中止。

（2月14日）

1トレンチ層位確認。3トレンチ掘り下げ。小畑弘己氏・眞邉彩氏（熊本大学）見学。

（2月15日）

4トレンチ掘り下げ。

（2月16日）

1トレンチ土層線引き。3・4トレンチ掘り下げ。

（2月17日）

1トレンチ土層線引き。3・4トレンチ掘り下げ。南日本新聞社取材。

（2月18日）

1トレンチ土層断面図作成。4トレンチを北側へ拡張。

（2月19日）

1トレンチ土層断面図作成。4トレンチ掘り下げ、土層線引き。

（2月20日）

1・4トレンチ土層断面図作成。原田小学校生徒・先生見学。

（2月21日）

1・4トレンチ土層断面図作成。3トレンチ写真撮影。1・3・4トレンチ埋め戻し。

（2月22日）

現場撤収作業。

調査終了後、文化財保護法第108条及び遺失物法第4条第1項に基づいて、「埋蔵物発見届」（平成26年2月24日付）を志布志警察署長へ、「発掘調査実施報告書」・「埋蔵文化財保管証」（平成26年2月24日付）を県教育委員会に提出し、発掘調査に係る諸手続きを実施した。

調査体制（平成26年度）

調査主体　志布志市教育委員会

調査責任者　志布志市教育委員会

		教　育　長	和田幸一郎
調査事務局	〃	生涯学習課長	樺山　弘昭
	〃	文化財管理室長	若松　利広
	〃	埋蔵文化財係長	上田　義明
	〃	主任主査	大窪　祥晃
	〃	主事補	坂元　裕樹
調査担当	〃	主任主査	相美伊久雄

調査指導　鹿児島国際大学　国際文化学部
教　授　大西　智和

調査参加者　鹿児島国際大学学生、鹿児島大学学生

調査の具体的経過

平成26年度の調査は、平成27年2月16日から2月27日まで実施した（実働10日）。調査表面積は33㎡である。

（2月16日）

3・4トレンチ復元作業、掘り下げ。墳丘構築法や埋葬施設についての手掛かりを得るために、墳頂平坦面に5・6トレンチを設定、掘り下げ。

（2月17日）

3・4・5・6トレンチ掘り下げ。墳丘端部や周濠の確認を行うために、墳丘北側裾部に7トレンチを設定、掘り下げ。

（2月18日）

3・5・6・7トレンチ掘り下げ。

（2月19日）

3・5・6・7トレンチ掘り下げ。墳丘端部や周濠の確認を行うために、墳丘西側裾部に8トレンチを設定、掘り下げ。

（2月20日）

3・5・6・8トレンチ掘り下げ。墳丘端部や周濠の確認を行うために、墳丘西側裾部に9トレンチを設定、掘り下げ。

（2月21日）

3・5・9トレンチ掘り下げ。原田小学校生徒・先生見学。

（2月22日）

3・5・9トレンチ掘り下げ。7トレンチ土層線引き。6トレンチサブトレンチ掘り下げ。

（2月23日）

3トレンチ掘り下げ。6・7トレンチサブトレンチ掘り下げ。7トレンチ土層断面図作成。

（2月24日）

3・5・6トレンチ掘り下げ。4・7・8・9トレンチ測量、土層断面図作成、写真撮影。
（2月25日）
各トレンチ埋め戻し。
（2月26日）
現場撤収作業。

調査終了後、文化財保護法第108条及び遺失物法第4条第1項に基づいて、「埋蔵物発見届」（平成27年3月2日付）を志布志警察署長へ、「発掘調査実施報告書」・「埋蔵文化財保管証」（平成27年3月2日付）を県教育委員会に提出し、発掘調査に係る諸手続きを実施した。

調査体制（平成27年度）

調査主体　志布志市教育委員会
調査責任者　志布志市教育委員会

		教　育　長	和田幸一郎
調査事務局	〃	生涯学習課長	榊山　弘昭
	〃	文化財管理室長	若松　利広
	〃	埋蔵文化財係長	上田　義明
	〃	主任主査	大窪　洋晃
	〃	主　事	坂元　裕樹
調査担当	〃	主任主査	相美伊久雄

調査指導　鹿児島国際大学　国際文化学部
教　授　大西　智和
調査参加者　鹿児島国際大学学生、鹿児島大学学生

調査の具体的経過

平成27年度の調査は、平成28年3月4日から3月15日まで実施した（実働9日）。調査表面積は27㎡である。
（3月4日）
3・5・6トレンチ復元作業。
（3月7日）
3・5・6トレンチ復元作業。池畑耕一氏見学。
（3月8日）
3・5・6トレンチ掘り下げ。埋葬施設についての手掛かりを得るために、墳頂平坦面に10トレンチを設定、掘り下げ。
（3月9日）
3・5・6・10トレンチ掘り下げ。
（3月10日）
3・6トレンチ掘り下げ。5トレンチ土層線引き。
（3月11日）
3・6トレンチ石材出土状況実測作業。3・6トレンチ清掃・土層線引き。
（3月12日）
5・6トレンチ土層線引き。10トレンチ掘り下げ。
（3月13日）
5・6・10トレンチ清掃、写真撮影、土層断面図作成。3トレンチ埋め戻し。
（3月14日）
6トレンチ土層断面図作成。5・6・10トレンチ埋め戻し。
（3月15日）
現場撤収作業。

調査終了後、文化財保護法第108条及び遺失物法第4条第1項に基づいて、「埋蔵物発見届」（平成28年3月17日付）を志布志警察署長へ、「発掘調査実施報告書」・「埋蔵文化財保管証」（平成28年3月17日付）を県教育委員会に提出し、発掘調査に係る諸手続きを実施した。

調査の体制（令和元年度）

調査主体　志布志市教育委員会
調査責任者　志布志市教育委員会

		教　育　長	和田幸一郎
調査事務局	〃	生涯学習課長	萩迫　和彦
	〃	文化財管理室長兼	
	〃	埋蔵文化財係長	上田　義明
	〃	主任主査	大窪　洋晃
調査担当	〃	主任主査	相美伊久雄

調査指導　鹿児島国際大学　国際文化学部
教　授　大西　智和
鹿児島国際大学　実習支援課
係　長　鐘ヶ江賢二
調査参加者　鹿児島国際大学学生

調査の具体的経過

令和元年度の調査は、令和2年2月3日から2月25日まで実施した（実働13日）。調査表面積は16㎡である。
（2月3・4・10日）
トレンチ復元作業。
（2月12日）
3・10トレンチ復元、掘り下げ。
（2月13日）
3・10トレンチ掘り下げ。埋葬施設についての手掛かりを得るため、10トレンチを拡張。
（2月14日）
3・10トレンチ掘り下げ。
（2月15日）
10トレンチ掘り下げ。墳丘端部の確認を行うために、墳丘南西側裾部に11トレンチを設定、掘り下げ。
（2月16日）
雨天中止。
（2月17日）

3トレンチ掘り下げ。10トレンチ拡張。横手伸太郎氏（肝付町教育委員会）見学。

（2月18日）

3・11トレンチ掘り下げ。6トレンチを3トレンチ側へ拡張、掘り下げ。墓壙ライン検出のために、12トレンチを設定。

（2月19日）

3・11・12トレンチ掘り下げ。10トレンチ土層断面図作成。上村俊雄氏見学。

（2月20日）

3トレンチ掘り下げ。10トレンチ写真撮影。11トレンチ写真撮影、測量。橋本達也氏（鹿児島大学総合研究博物館）見学。

（2月21日）

3トレンチ掘り下げ。11・12トレンチ土層断面図作成、写真撮影。

（2月25日）

各トレンチ埋め戻し。現場撤収作業。

調査終了後、文化財保護法第108条及び遺失物法第4条第1項に基づいて、「埋蔵物発見届」（令和2年2月28日付）を志布志警察署長へ、「発掘調査実施報告書」・「埋蔵文化財保管証」（令和2年2月28日付）を県教育委員会に提出し、発掘調査に係る諸手続きを実施した。

調査の体制（令和2年度）

調査主体　志布志市教育委員会

調査責任者　志布志市教育委員会

教　育　長　和田幸一郎（令和3年2月23日まで）

福田　裕生（令和3年2月24日から）

調査事務局　〃　生涯学習課長　江川　一正

〃　文化財管理室長　上田　義明

〃　生涯学習課長補佐　小村　美義

調査担当　〃　埋蔵文化財係長　相美伊久雄

〃　技　師　補　川路阜太朗

調査指導　鹿児島国際大学　国際文化学部

教　授　大西　智和

鹿児島国際大学　実習支援課

係　長　鐘ヶ江賢二

調査協力　鹿児島大学埋蔵文化財調査センター

教　授　中村　直子

調査参加者　鹿児島国際大学学生

調査の具体的経過

令和2年度の調査は、令和3年2月9日から2月23日まで実施した（実働11日）。調査表面積は12㎡である。

（2月9・10日）

3・6・10トレンチ復元作業。

（2月12日）

3・6・10トレンチ掘り下げ。11トレンチ拡張。埋葬施設についての手掛かりを得るため、13トレンチ設定。

（2月13日）

3トレンチ南側清掃。3トレンチ北側サブトレンチ掘り下げ。土層の再確認のため、5トレンチ東側復元作業。11・13トレンチ掘り下げ。

（2月14日）

3・6・10・13トレンチ掘り下げ。盗掘坑底部付近の埋土のふるい作業開始。中村直子氏による古墳周辺の地下レーダー探査。

（2月15日）

3・6・10・13トレンチ掘り下げ。11トレンチ測量、土層断面図作成。

（2月16・17日）

3・6・10トレンチ掘り下げ。11トレンチ埋め戻し。竹中正巳氏（鹿児島女子短期大学）見学。

（2月18日）

3トレンチ西壁土層断面図作成。13トレンチ土層断面図作成。出土石材の重量計測。

（2月19日）

3・6・10トレンチ測量。5トレンチ土層断面図修正。6トレンチ北壁土層断面図作成。11トレンチ写真撮影。橋本達也氏見学。松崎大嗣氏・湯ノ口美和子氏（指宿市教育委員会）見学・協力。

（2月20日）

3トレンチ西・南壁写真撮影。3トレンチ石材の測量用写真撮影。3・13トレンチ埋め戻し。

（2月22日）

3・6・10トレンチ埋め戻し。

（2月23日）

現場撤収作業。

調査終了後、文化財保護法第108条及び遺失物法第4条第1項に基づいて、「埋蔵物発見届」（令和3年2月25日付）を志布志警察署長へ、「発掘調査実施報告書」・「埋蔵文化財保管証」（令和3年2月25日付）を県教育委員会に提出し、発掘調査に係る諸手続きを実施した。

第3節　整理・報告書作成作業

整理・報告書作成作業は、文化庁の国庫補助事業を利用し、市内遺跡発掘調査等事業として、令和3年度に実施した。

令和3年度における調査体制及び作業の内容・経過は以下のとおりである。作業の具体的経過は日誌抄を月毎に集約して記載する。

調査の体制（令和３年度）

調査主体　志布志市教育委員会
調査責任者　志布志市教育委員会
　　教　育　長　福田　裕生
調査事務局　〃　生涯学習課長　江川　一正
　　〃　文化財管理室長　上田　義明
　　〃　生涯学習課長補佐　小村　美義
　　〃　技　師　補　川路皐太朗
調査担当　〃　埋蔵文化財係長　相美伊久雄
調査指導　鹿児島国際大学　国際文化学部
　　教　授　大西　智和
　　鹿児島国際大学　実習支援課
　　係　長　鐘ヶ江賢二
　　鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
　　教　授　中村　直子
　　写測エンジニアリング株式会社
　　技術顧問　牛嶋　茂

作業の具体的経過

【６月】
大西智和先生・鐘ヶ江賢二先生指導。
【７月】
牛嶋茂氏写真撮影指導。
【８月】
遺物選別・実測。
【10月】
大西先生・鐘ヶ江氏・中村直子先生指導。
【11月】
遺物トレース、遺物レイアウト。
【12月】
大西先生指導、原稿執筆。
【１・２月】
原稿執筆。入稿・校正。
【３月】
印刷・製本。

第４節　調査後の成果紹介

調査成果の速やかな公表を目的として、これまで下記の報告を行ってきた。

大西智和・鐘ヶ江賢二・松崎大嗣　2013「志布志市有明町原田古墳の発掘調査（速報）」『鹿児島考古』43号　鹿児島県考古学会
大西智和・鐘ヶ江賢二・相美伊久雄　2014「志布志市有明町原田古墳の発掘調査（２次調査速報）」『鹿児島考古』44　鹿児島県考古学会
大西智和・鐘ヶ江賢二・相美伊久雄　2015「原田古墳―第３次発掘調査速報―」『平成27年度鹿児島県考古学会研究発表会要旨集』　鹿児島県考古学会
大西智和・鐘ヶ江賢二・相美伊久雄　2016「志布志市原田古墳第３次発掘調査速報」『鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告』13　鹿児島国際大学国際文化学部博物館実習施設考古学ミュージアム
大西智和・鐘ヶ江賢二・相美伊久雄　2017「志布志市原田古墳第４次発掘調査速報」『鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告』14　鹿児島国際大学国際文化学部博物館実習施設考古学ミュージアム

本書をもって正式報告とする。これまでに発表してきた内容と齟齬がある場合は、本書の記述をもって正式なものとする。

第１表　周辺遺跡地名表

No.	遺跡番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世
1	**221-306**	**原田古墳群**	**有明町原田字大塚**				○		
2	221-504	大塚	有明町原田字大塚ほか		○		○		
3	221-439	東中原	有明町原田字東中原ほか				○		
4	221-503	下原	有明町原田字下原			○	○		
5	221-375	高井田古墳群	有明町原田字下原				○		
6	221-343	塚堀	有明町原田字塚堀ほか		○			○	
7	221-448	上五敷	有明町原田字上五敷ほか				○		
8	221-450	西ノ堀	有明町原田字西ノ堀ほか				○		
9	221-352	清水	有明町原田字清水			○			
10	221-407	坂ノ上	有明町原田字坂ノ上ほか			○	○		
11	221-366	長田	有明町原田字長田ほか		○	○	○		○
12	468-138	浜浦	曽於郡大崎町高井田字浜浦ほか		○				
13	468-96	五鶴	曽於郡大崎町岡部石行字五鶴			○	○		
14	468-98	早馬	曽於郡大崎町岡別府字早馬ほか			○	○		
15	468-129	宮田	曽於郡大崎町岡別府字宮田				○		
16	468-53	下堀	曽於郡大崎町岡別府字下堀ほか		○	○	○	○	○
17	468-90	千洗	曽於郡大崎町井俣字千洗			○	○		
18	468-30	金丸城跡	曽於郡大崎町井俣字小牧ほか			○	○		
19	468-86	井俣牧	曽於郡大崎町井俣字牧			○	○		
20	468-122	井俣和田	曽於郡大崎町井俣字和田ほか				○		
21	468-68	平良上A	曽於郡大崎町井俣字平良上平田		○		○		
22	468-123	平良宇都A	曽於郡大崎町井俣字					○	
23	468-70	平良上C	曽於郡大崎町井俣字平良上		○	○	○		
24	468-69	平良上B	曽於郡大崎町井俣字平良上				○		
25	468-84	中仲B	曽於郡大崎町井俣字中仲			○	○		
26	468-92	中仲A	曽於郡大崎町井俣字中仲			○	○		
27	468-93	久木野堀	曽於郡大崎町麦田字久木野堀			○	○		

第１図　遺跡位置（１：50,000）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

志布志市は、鹿児島県の最東部に位置し、宮崎県都城市及び串間市と県境をなす。北は曽於市、南西は大崎町と接し、南は太平洋に向け湾口を開く志布志湾に面する。平成18年１月１日に志布志町・有明町・松山町の三町が合併して誕生した市である。

本市の地形は、東から志布志湾に向かって緩やかに傾斜し、海岸近くで急崖となり、わずかな沖積平野を経て海岸線となる。この海岸線は、西側に旧期砂丘・新期砂丘に二分される砂丘海岸が続くのに対し、東側は日南層群で構成される岩礁海岸となる。市の北東部には御在所岳（530.４ｍ）・笠祇岳（444.２ｍ）・陣岳（349.３ｍ）など、日南層群が構成する急峻な山岳地帯がある。

その西側には入戸火砕流が広く分布し、いわゆるシラス台地を形成し、志布志市の主体をなす。「原（ばる）」と呼ばれる比較的平坦な台地であるシラス台地は、南流する前川・安楽川・菱田川など大小の河川の浸食作用による深い浸食谷（「迫（さこ）」）により細かく刻まれ、大小の狭長な台地となっている。

このシラス台地からは、北部の霧岳（408.３ｍ）や中央部の岳野山（274.３ｍ）、西部の宇都丘（179.１ｍ）・草野丘（268.４ｍ）など、市北東部同様の日南層群が構成する山岳・丘陵が突き出ている。

前述の三河川の流域には、高位・中位・低位の三段の段丘が認められる。低・中位段丘では、段丘崖下からの自然湧水により集落が形成されてきた。一方、高位段丘では、地下水位が深いために集落形成が困難であり、「蓬原開田」や「野井倉開田」などのように近～現代に開かれるまでは、畑地として利用されるにとどまっていた。

この地域の地質は古いほうから、日南層群－阿多鳥浜火砕流－夏井層－阿多（夏井）火砕流－旧期ローム層－入戸火砕流－新期火山灰層となる。日南層群は、主に頁岩・砂岩の細互層から成り、年代は漸新世～前期中新世とされている。阿多鳥浜火砕流は、夏井海岸の一部に認められるもので、23～25万年前とされる。夏井層は、下部の貝や植物の化石を含むシルト層と上部の礫層からなる。阿多（夏井）火砕流は、黒色を呈する溶結度の低い均質な凝灰岩で、年代は8.５～10.５万年前とされる。入戸火砕流は、海岸に沿った地域では海抜40ｍ程のシラス台地を形成する。下部には、大隅降下軽石層が存在する。

原田古墳群は、志布志湾に注ぐ田原川の河口から約６㎞上流東岸の、「菱田原」と呼ばれるシラス台地の縁辺部（標高約60ｍ）に位置する。周辺は昭和38(1963)年12月から昭和41(1966)年11月の間に行われた土地改良整備事業によって区画された茶畑などの畑地が広がっている。

第２節　歴史的環境

原田古墳群は、志布志市有明町原田小字大塚に所在する。小字が「大塚」であり、土を大きく盛り上げた場所の存在が、昔から認識されていたことがうかがえる。

原田古墳群が所在する志布志市には、現在約500ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が認められている。

戦前には、大正５(1916)年の瀬之口伝九郎氏による六月坂横穴墓群についての報告や昭和11(1936)年の島戸貞良氏による飯盛山古墳についての報告、昭和19(1944)年に出口Ａ遺跡採集の独鈷状石器を紹介した梅原末治氏の調査研究がある。

戦後は、河口貞徳氏・諏訪昭千代氏・上村俊雄氏・酒匂義明氏の学術調査・研究に加え、海老原行秀氏・瀬戸口望氏という志布志町在住の研究者による熱心な調査・研究が行われており、学史上重要な遺跡も多い。

1980年代になると、主に志布志町において圃場整備に伴う発掘調査が行われ、縄文時代の調査事例が増加した。

2000年代以降は、主に有明町において農道整備に伴う発掘調査が行われ、弥生・古墳時代の様相が明らかとなった。さらに、地域高規格道路（都城志布志道路）や東九州自動車道に伴う大規模な発掘調査が行われ、質量ともに充実した資料が増加している。

本市は現在の行政区分では鹿児島県に属するが、過去は日向国に属しており、明治４(1871)年の廃藩置県後も一時期、都城県や宮崎県に属した歴史もある。したがって、この地域の歴史・文化を考える上で薩摩・大隅だけでなく、日向地方の影響も考慮する必要がある。

旧石器時代

中須Ｂ遺跡・蕨野Ｂ遺跡では剥片尖頭器・角錐状石器等が、安楽小牧Ｂ遺跡ではナイフ形石器が出土している。

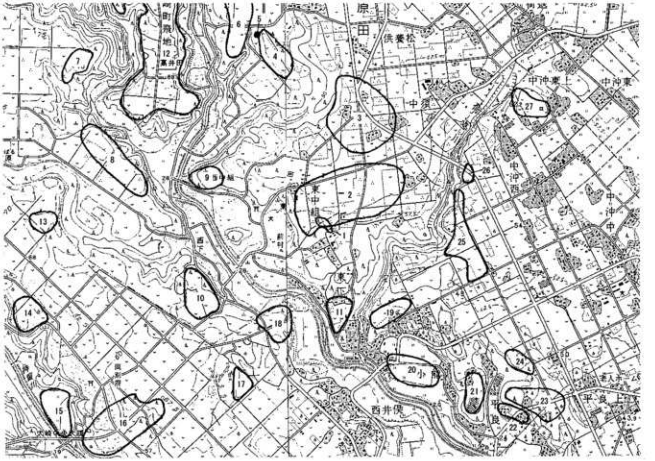
次五遺跡や和田上遺跡、中原遺跡では、畦原型細石刃核が出土しており、硬質砂岩や珪質頁岩を利用している。畦原型細石刃核が濃密に分布する宮崎平野地域との関係や石材の原産地を考える上で注目される。

縄文時代

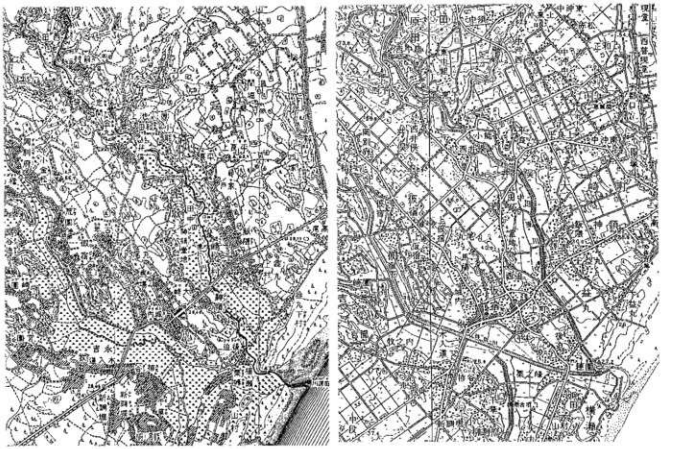
志布志町では瀬戸口氏等の調査によって、「縄文銀座」と呼ばれるほど多数の遺跡が見つかっている。

草創期　学史上重要な東黒土田遺跡がある。隆帯文土器や舟形配石炉、貯蔵穴が見つかっている。特に貯蔵穴から出土した堅果類は日本最古である。安楽小牧Ｂ遺跡では、爪形文土器が出土している。

早期　前半期の竪穴建物跡や集石、連穴土坑が多数見つかった倉園Ｂ遺跡や春日堀遺跡、前半期の連穴土坑や多数の集石、被熱破砕礫が見つかった稲荷迫遺跡・高吉



第２図　周辺遺跡（１：25,000）



第３図　周辺環境の変遷（１：60,000）

B遺跡・下堀遺跡・横堀遺跡・次五遺跡、塞ノ神A式壺形土器等の良好な資料が出土した夏井土光B遺跡、耳栓が出土した稲荷上遺跡・横堀遺跡・安楽小牧B遺跡など、シラス台地縁辺部に遺跡数が多い。

前期　曽畑式が出土した別府石踊遺跡、野久尾遺跡、本村遺跡などがあるが、調査事例は少ない。

中期　この時期も調査事例は少ないものの、春日式期の竪穴建物が見つかった前谷遺跡、野久尾式や深浦式・船元式が出土した野久尾遺跡のように重要な遺跡がある。このほか、宇都遺跡や山ノ口遺跡では大平式の良好な資料が出土している。

後期　代表する遺跡として中原遺跡と片野洞穴がある。中原遺跡では在地系の宮之迫式・指宿式と瀬戸内系の中津式・福田KⅡ式・宿毛式の良好な資料が多数出土している。片野洞穴では西平式～御領式期の動物骨や貝殻、釣針やかんざし等の骨角器が出土している。

市内は、中岳Ⅱ式の遺跡が多く認められており、下原遺跡では竪穴建物跡と埋設土器が、稲荷迫遺跡では埋設土器が見つかっている。

このほか、後期のほぼ全ての型式が出土した家野遺跡、独鈷状石器が見つかった出口A遺跡がある。

晩期　井手上A遺跡や上苑遺跡では入佐式深鉢の埋設土器が見つかっている。

小迫遺跡では黒川式期の良好な資料が認められており、クズの葉と推定される木葉痕をもつ組織痕土器が出土している。

弥生時代

縄文時代に比べると調査事例は少ないものの、学史上重要な遺跡が存在する。一つは京ノ峯遺跡で、中期後半の円形周溝墓や方形周溝墓が多数見つかっている。南九州では稀有な墓制であり、近畿・瀬戸内地方の影響が考えられている。

もう一つは土橋遺跡で、明治40(1907)年、中広形銅鉾が見つかっている。県内唯一の、さらに本土最南端の発見例である。中期後半に位置づけられるもので、中広形銅矛は高知県中央～西部、豊前～豊後地域に分布が集中することから、豊後水道地域における地域間交流の過程でもたらされた可能性が指摘されている。

稲荷迫遺跡では中期前～中葉の入来Ⅰ・Ⅱ式期の土坑墓が検出された。また、刻目突帯文土器の良好な資料が認められている。刻目突帯文土器が主体を占める遺跡は大隅半島では稀であり、注目される。

小迫遺跡で出土した刻目突帯文土器期の可能性がある精製浅鉢からは、イネやエゴマの圧痕が見つかっている。

井手上A遺跡では、中期中葉の入来Ⅱ式期の竪穴建物跡が見つかっている。中期後半の山ノ口Ⅱ式期になると竪穴建物跡の検出例が増加し、高吉B遺跡、長田遺跡、本村遺跡、下原遺跡、井手間遺跡、前谷B遺跡がある。

京ノ峯遺跡や高吉B遺跡、稲荷迫遺跡では瀬戸内地域から搬入された土器が出土している。夏井土光遺跡では柱状片刃石斧が出土している。

古墳時代

古墳については、第3節で詳述する。

集落遺跡は、有明町において調査事例が多い。仕明遺跡や春日堀遺跡、上苑A遺跡では中津野～東原式期の竪穴建物跡が見つかっている。屋部当遺跡では迂堂原～笹貫式期の、長田遺跡では笹貫式期の竪穴建物跡が見つかっている。志布志町でも、稲荷迫遺跡において笹貫式期の竪穴建物跡が見つかっている。なお、春日堀遺跡で見つかった古墳時代前期の花弁形建物跡は県内最大である。

市内には、笹貫式新段階期（7～8世紀代）の調査事例が多く、宮脇遺跡、安良遺跡、仕明遺跡、春日堀遺跡、上苑A遺跡がある。

春日堀遺跡では、竪穴建物跡・掘立柱建物跡・溝状遺構が見つかっており、7世紀中～後半頃の集落跡とされる。溝状遺構は、安良遺跡でも見つかっている。

上苑A遺跡は、6世紀末～7世紀後葉の竪穴建物跡が21基見つかっている。数多くの7世紀代の須恵器や宮崎平野部から搬入された土師器、炉壁や製錬滓、精錬鍛冶滓等の製鉄・鍛冶関連遺物が出土したことが特筆される。

市内では、県内での出土例が少ない6世紀末～8世紀前半頃の須恵器が多数認められており、様相が不明瞭な7世紀代の南九州を考える上で、重要な地域である。

古代

水ヶ迫横穴墓で須恵器の蔵骨器が見つかっている。墨書土器が小迫遺跡、安良遺跡、牧ノ原A遺跡、井手上A遺跡で出土している。製塩土器が野久尾遺跡、宮脇遺跡、稲荷迫遺跡、仕明遺跡など出土している。

8世紀代の須恵器が宮脇遺跡や安良遺跡などで出土しているように、8世紀代までは市内でも遺跡が確認されるものの、9世紀以降は様相がはっきりしない。調査事例が乏しいこともあるが、7世紀代に比べると遺跡自体が少ない可能性もある。

中世

この地域は中世において日向国諸県郡救仁院・救仁郷とされた。また志布志の名が史料で確かめられるのは、正和5(1316)年のことで、「日向方島津御庄**志布志津**大沢水宝満寺敷地…」(『沙弥蓮正打渡状案』)とあり、万寿3(1026)年平季基が開いた島津庄・日向諸県郡一帯の港であったと考えられている。

室町時代以降も交通の要衝として栄えていたようであ

り、永禄5(1562)年に著された明の海防・倭寇対策書である『籌海図編』巻二（倭国事略）には、薩摩・大隅の港の一つとして記された「審孛署」は志布志とされる。

このような交通の要衝であった志布志を巡って、中世の約400年間に武士興亡の歴史が繰り広げられた場所が国指定史跡の志布志城跡である。

志布志城とは、内城・松尾城・高城・新城の四城の総称である。志布志城は文治5(1189)年頃の敘仁院氏の居城に始まって以来、楡井氏・畠山氏・肝付氏・島津氏など数々の領主に変遷した。

平成18(2006)年以降、保存整備目的で継続的に発掘調査が行われ、華南三彩のような中世後期の中国産陶磁器や東南アジア産陶器も出土している。

市内にはこの他、建久(1190～1198)年間に地頭弁済使安楽平九郎為成の居城とされる安楽城跡、文治4(1188)年に平重頼によって築かれたとされる松山城跡、南北朝期(1359年)に救仁郷氏の居城とされる篷原城跡などが存在する。

中世山城以外の調査事例では、安良遺跡が注目できる。この遺跡では、掘立柱建物や竪穴建物が見つかっている。また、中世前期の輸入陶磁器や国産陶器のほか、畿内系羽釜、楠葉型・和泉型瓦器椀も出土している。炭化ご飯塊と炭化籾塊の出土も注目される。安良遺跡から約1km北に位置する安楽城跡や明治26(1893)年に境内から青白磁四耳壺の蔵骨器や鏡・太刀・青白磁合子などが見つかっている安楽山宮神社を含めて、その歴史的背景が注目される。

長田遺跡や仕明遺跡では、中世墓が見つかっている。宇都上遺跡では、石塔類や輸入陶磁器、国産陶器、そしてタイ産四耳壺等が埋まっていた大型土坑を検出している。

近世

日向国諸県郡志布志郷とされ、東を秋月藩と接することから陸海ともにきわめて重要な郷であった。現在の志布志小学校に地頭仮屋がおかれ、その周辺には武家屋敷が建ち並ぶ「麓」を形成していた。この「志布志麓」は、令和元年5月に日本遺産に認定された。

藩米等の集積・積出港であった前川河口には、津口番所が置かれていた。藩政末期には琉球を通しての密貿易が行われ、その商人であった中山宗五郎の屋敷は密貿易屋敷と呼ばれていた。

これら地頭仮屋跡・津口番所跡・密貿易屋敷跡では、確認調査が行われ、陶磁器類が出土している。

船迫遺跡では、県内遺跡からは初の出土例となった二分金が見つかっている。

近代

明治4(1871)年の廃藩置県によって、鹿児島県諸県郡志布志郷となり、同年11月には新設の都城県に属した。明治6年には宮崎県の所管に移されたが、明治9年に宮崎県が鹿児島県に編入されることに伴い再び鹿児島県に属することになった。そして、明治16年宮崎県再設置の際は鹿児島県に残り、鹿児島県南諸県郡に属した。

この時期の遺跡では戦争遺跡が注目できる。太平洋戦争末期、連合軍の南九州上陸作戦（オリンピック作戦）を予想した日本軍は志布志湾沿岸に洞窟式の地下陣地を造った。その現存している一つが、権現島水際陣地跡である。また、野井倉台地には昭和20(1945)年に海軍航空隊志布志基地（野井倉飛行場）が建設された。

（参考文献）※発掘調査報告書は割愛した。

有明町誌編さん委員会 1980『有明町誌』

梅原末治 1944「大隅発見の異形石器」『人類学雑誌』59－7

大木公彦・内村公大 2012『夏井海岸の地形・地質調査報告書』志布志市教育委員会

志布志町誌編集委員会 1972『志布志町誌』上巻

志布志町教育委員会 1982『志布志の郷土史読本』第2集

志布志町教育委員会 1985『志布志の埋蔵文化財』

山畑敏寛 2009「志布志港の「みなと文化」」『港別みなと文化アーカイブ』

第3節　志布志市内の古墳の概要

志布志市内には、本報告の原田古墳群（原田古墳と原田地下式横穴墓群）以外にも古墳が存在する、あるいは存在していた(第4図)。以下、各古墳について説明する。原田古墳群については、第4節で説明する。

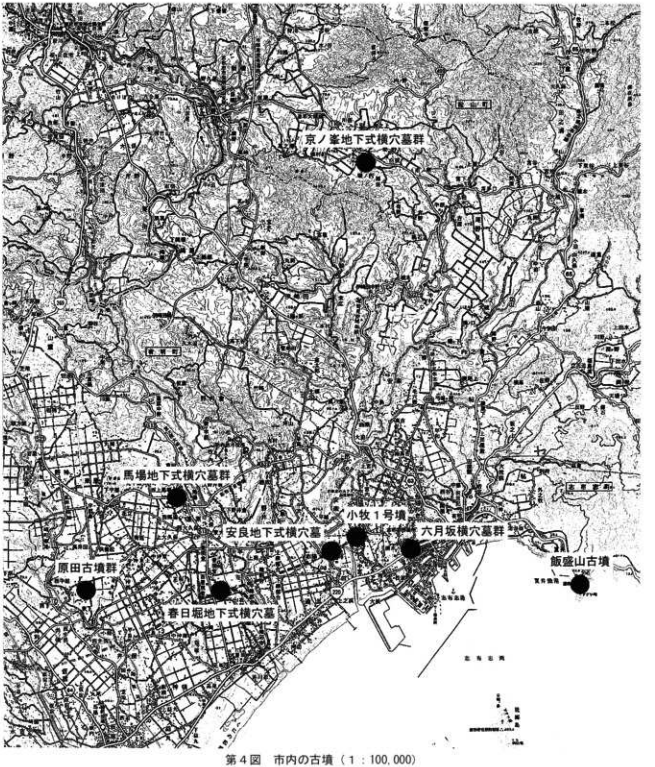
1　飯盛山古墳（志布志町夏井字牟田）

飯盛山古墳は、志布志湾に突き出た標高約50mのダグリ岬上に位置する。

昭和38(1963)年、国民宿舎ダグリ荘建設工事の際に、主体部を含む墳丘の大部分を失っている。平成10(1998)年には、前方部南側において国民宿舎改築工事に伴う発掘調査が行われている（志布志町教委2001）。

国民宿舎建設工事前の測量図（第5図上）から、主軸は東西方向で後円部が東に向く、全長約80mの前方後円墳とされる。前方部は長さ約43m、幅20m、高さ約1.5m、後円部は長さ約37m、幅約30m、高さ4.5mを測る（志布志町誌編集委員会1972）。墳丘の形態は、前方部の幅が狭く、後円部に比べて高さも低いという特徴をもつ。

国民宿舎建設工事の際には、壺形埴輪が採集されている。昭和40(1965)年には、芝生の植付作業時に長さ34mにわたって葺石が見つかっている。平成10年の発掘調査では、前方部側面で葺石が確認され、壺形埴輪や器



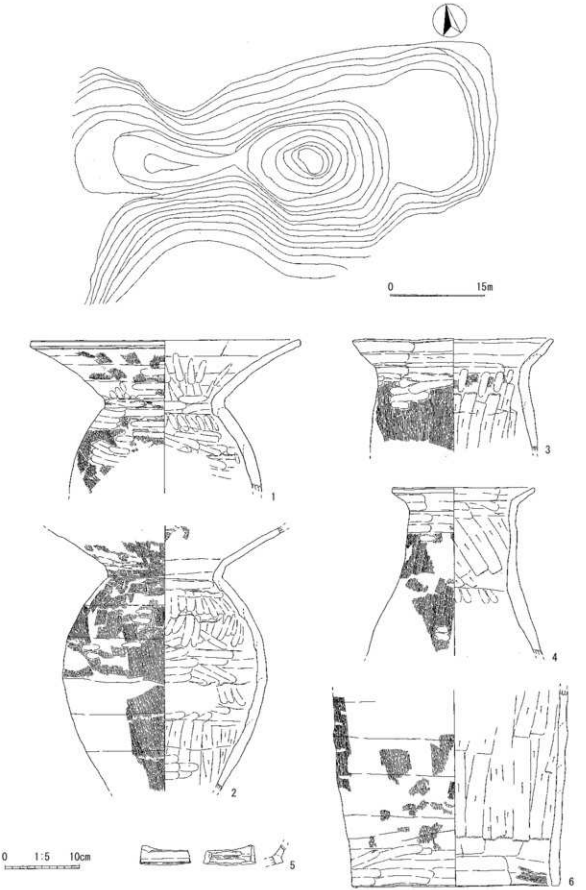
第４図　市内の古墳（１：100,000）

台形墳輪が出土している。したがって、本来の墳丘は葺石に覆われ、墳輪がめぐらされていたと推定される。

埋葬施設は、長さ約1.8ｍ、幅約0.9ｍ、高さ約0.9ｍで栗石積みの竪穴式石室が後円部墳頂部にあったとされている。

墳輪は、単口縁壺形埴輪や器台形埴輪を基本とし、二重口縁壺形埴輪も認められる（第５図１～６）。また、国民宿舎建設工事の際には、ガラス製勾玉や丸玉、小玉も採集されている。

その時期は、中期初頭の時期が想定されている（橋本2010）。その被葬者について橋本達也氏は、海を介した交易がその権力基盤を生成した可能性を指摘している（橋本2008）。



第５図　飯盛山古墳関係資料（測量図は志布志町教委 2001 から、遺物実測図は橋本ほか 2008 から引用）

2　小牧１号墳（志布志町安楽字小牧）

小牧１号墳は、安楽川河口から約１㎞上流西岸の、野井倉台地から長く延びた舌状台地上（標高約 50 m）に位置する。市指定の史跡である。

昭和 57(1982) 年、工業用地造成中に発見された。１号墳の一部は工事の際に削られており、その断面から人為的に盛り上げられたことが判断できる。

全長約 40 m、最大幅約 15 m、高さ約 2.5 m の前方後円墳とされる（第６図上）。発掘調査は行われておらず、埋葬施設は不明である。

墳丘上では土師器（第６図５）や須恵器（第６図１～４）、葺石と思われる礫などが採集されている（上村 1984）。土師器は、高坏や壺、小型丸底壺がある。須恵器は、有蓋高坏や壺、甕がある。須恵器の中には、TK43 型式に比定可能な長脚二段透しをもつ高杯があり、６世紀後半に位置づけられる。

小牧１号墳が前方後円墳の場合、古墳時代後期としては県内唯一のものとなる。しかし、発掘調査だけでなく詳細な測量調査も行われていないために墳形は不明確であり、須恵器も採集品であることから、断定はできない。

なお、１号墳の周辺では３基の円墳が存在するとされているもの、実態は不明である。

3　馬場地下式横穴墓群（有明町蓬原字小松）

馬場地下式横穴墓群は、菱田川河口から約 5.3 ㎞上流西岸のシラス台地縁辺部（標高約 60 m）に位置する。市指定史跡である。

これまで６基確認されており、このうち３基（A～C）は昭和 37(1962) 年、県道拡幅工事中によって台地を掘り下げた際に発見されている（有明町誌編さん委員会 1980）。

Aは、竪坑が約 1.3 m、玄室天井は切妻造りの家形で、底面は楕円形である。玄室の規模は、中軸線 2.3 m、幅は足側で 0.75 m、頭側で 1.35 m、高さ 0.9 m。羨道は完全に埋まっており、径約 1.0 m。人骨１体とヤリ１点が見つかったとされる。

Bは、玄室は卵型（平面か？：編著者注）で 1.3 m×1.8 m の大きさである。人骨２体と鉄剣１点が見つかったとされる。

Cは、玄室規模が奥行 2.0 m、幅 0.85 m、高さ 0.6 m で、遺物は見つかっていない。

なお、AとBで見つかった遺物は現在所在不明である。しかし、出土遺物を河口貞徳氏が実測したとみられる図面が鹿児島県立埋蔵文化財センターに「河口コレクション」として所蔵されている。

その図面には「蓬原県道改修の時地下式土壙より出土（人骨二体を伴う）昭和三十八年」と記されており、本地下式横穴墓出土遺物の実測図と考える。県立埋蔵文化財センターのご厚意により掲載の許可を受けた。掲載図（第９図）は、河口氏による実測図をトレースしたものである。

１はBから見つかった遺物とみられる。有明町誌には「鉄剣」と報告されているが、図面から判断すると「鉄刀」である。

現存長 96.6 ㎝、最大幅 2.8 ㎝、刃部厚 0.6 ～ 0.7 ㎝を測る。刃部は平造りとみられる。茎部には目釘孔が１つ描かれている。

有明町誌では、全長 95.5 ㎝、幅 2.3 ㎝とされており、その記録と概ね一致する。

２はAから見つかった遺物とみられる。有明町誌には「ヤリ」と報告されているが、短剣の可能性もあろう。図面から判断すると、現存長 36.0 ㎝、最大幅 4.0 ㎝、実測箇所の厚さは 0.6 ㎝を測る。刃部断面は凸レンズを呈する。

有明町誌では、全長 51.67 ㎝、茎部 16.0 ㎝、幅 3.5 ㎝とされており、全長について齟齬がみられる。出土後に破損し、実測時には短くなっていた可能性もあろう。

なお、昭和 37 年以前にも２基見つかっており、それぞれの墓から頭蓋骨１点と鉄剣１点、頭蓋骨２点と鉄剣１点が出土したことが伝わっている。また、県道の法面に竪坑が１基確認されている。

4　京ノ峯地下式横穴墓群（松山町泰野字京ノ峯）

京ノ峯地下式横穴墓群は、志布志湾から直線距離で約 10 ㎞内陸にある独立丘陵の西端部（標高約 170 m）に位置する。市指定の史跡である。

平成３(1991) 年度に住宅団地等の造成工事に伴い発掘調査が行われた（松山町教委 1993）。

地下式横穴墓が９基検出されており、全て平入りで、玄室は小型となり、羨道が認められないものである（第７・８図）。

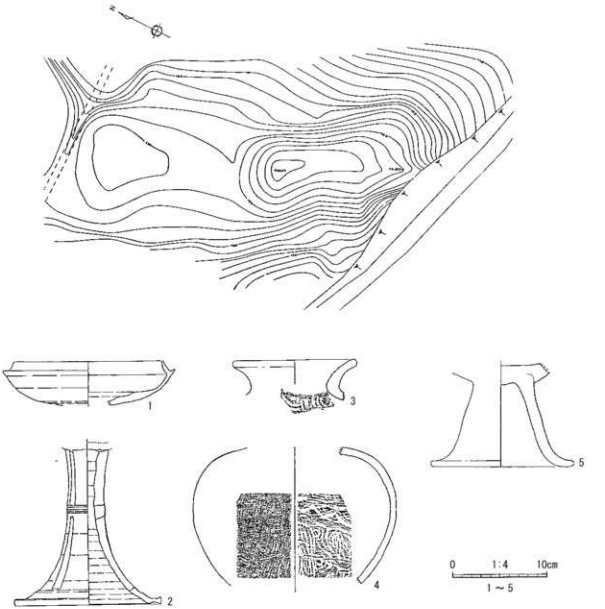
１号墓は、竪坑が長さ 1.5 m、幅 1.1 m の腰張りの三角形状を呈し、深さ 0.3 m。玄室は、奥行 0.5 m、幅 1.1 m の横長で、高さ 0.2 m。玄室は、凝灰岩で閉塞されている。副葬品や人骨は確認されていない。

２号墓は、竪坑が長さ 1.0 m、幅 1.4 m の横長の隅丸長方形を呈し、深さ 0.4 m。玄室は、奥行 1.0 m、幅 1.4 m の横長で、高さ 0.25 m。玄室は、凝灰岩で閉塞されている。副葬品や人骨は確認されていない。

３号墓は、竪坑が長さ 0.6 m、幅 1.4 m の横長の隅丸長方形を呈し、深さ 0.5 m。玄室は、奥行 0.4 m、幅 1.0m の横長で、高さ 0.2 m。副葬品や人骨は確認されていない。

４号墓は、竪坑が長さ 1.0 m、幅 1.6 m の横長の不定形を呈し、深さ 0.6 m。玄室は、奥行 0.2 m、幅 1.6 m の横長で、高さ 0.3 m。副葬品や人骨は確認されていない。

５号墓は、竪坑が長さ 1.9 m、幅 1.4 m の縦長の台形状を呈し、深さ 0.9 m。玄室は、奥行 0.7 m、幅 1.5 m の横長で、高さ 0.3 m。玄室は、凝灰岩で閉塞されてい



第６図　小牧１号墳関係資料（上村 1984 から引用）

る。副葬品や人骨は確認されていない。

６号墓は、竪坑が長さ 1.2 m、幅 2.0 m の横長の不定形を呈し、深さ 1.0 m。玄室は、奥行 0.7 m、幅 1.8 m の横長で、高さ 0.4 m。副葬品や人骨は確認されていない。

７号墓は、竪坑が長さ 0.5 m、幅 1.8 m の横長の隅丸長方形を呈し、深さ 0.6 m。玄室は、奥行 0.6 m、幅 1.1 m の横長で、高さ 0.3m。副葬品や人骨は確認されていない。

８号墓は、竪坑が長さ 0.5 m、幅 1.0 m の横長の隅丸長方形を呈し、深さ 0.2 m。玄室は、奥行 0.5 m、幅 1.5 m の横長で、高さ 0.2m。玄室は、凝灰岩で閉塞されている。副葬品や人骨は確認されていない。

９号墓は、竪坑が長さ 1.4 m、幅 2.4 m の横長の隅丸長方形を呈し、深さ 0.4 m。玄室は、奥行 0.6 m、幅 1.8 m の横長で、高さ 0.4 m。副葬品や人骨は確認されていない。

なお、２・８・９号墓は弥生時代中期の円形周溝墓や方形周溝墓の周溝と切り合った状態で見つかっている。その前後関係は確認できなかったとのことである。

円形周溝墓と切りあっていることや古墳時代の遺物が遺跡内から出土していないこともあり、弥生時代の横口式土壙墓と考える向きもある（（公財）鹿児島県埋文調セ 2020 a）。

５　春日堀地下式横穴墓（有明町蓬原字春日堀）

春日堀地下式横穴墓は、菱田川河口から約 3 km 上流西岸の河岸段丘（第二段丘面）上に位置する（標高約 30 m）。

平成 26 ～ 30（2014 ～ 2018）年度、東九州自動車道建

設に伴い発掘調査が行われた（（公財）鹿児島県埋文調セ 2020 b）。

古墳時代終末期（7世紀中～後半）の溝状遺構の床面において、地下式横穴墓の竪坑が検出されている（第10図）。玄室は、竪坑埋土の流入や天井部や羨道の崩落により埋没していた。

竪坑は長さ0.8 m、幅0.6 mの縦長で、深さ0.5 m。羨道は幅0.6 m、奥行0.1 m、高さ0.2 m。玄室は、平入りの幅1.2 m、奥行0.8 mの横長で、高さ0.4 m（規模は、報告書掲載図面から計測した）。

アカホヤ土塊が羨道と玄室で検出されていることから、土塊閉塞の可能性が指摘されている。人骨や副葬品は確認されていない。

溝が埋没する以前に、溝の壁面を掘り込んで玄室を構築しており、時期は7世紀後半頃と推定されている。

6　安良地下式横穴墓群（志布志町安楽字勢園）

安良地下式横穴墓は、安楽川河口から約2㎞上流東岸の河岸段丘（第二段丘面）上に位置する（標高約20 m）。

平成28・29(2016・2017)年度、東九州自動車道建設に伴い発掘調査が行われた（（公財）鹿児島県埋文調セ 2020 c）。

古墳時代終末期の溝状遺構の床面において、竪坑が検出されている（第11図）。

竪坑は長さ1.4 m、幅1.6 mの横長で、深さ1.4 m。羨道は幅0.7 m、奥行0.3 m、高さ0.4 m。玄室は平入りの幅1.6 m、奥行1.4 mの横長で、高さ0.3 m。

玄室天井は不明瞭で確認できていない。玄室床面中央に円形のピットが確認されている。玄室内から副葬品や人骨は確認されていない。

検出状況から溝状遺構が地下式横穴墓よりも新しいとされている。この場合、溝が地下式横穴墓の竪坑上に偶然構築されたことになる。そのように考えるよりも、春日堀地下式横穴墓同様、溝を掘り込んで玄室を構築している可能性が高いと考えたい。

7　六月坂横穴墓群（志布志町安楽字船礎）

六月坂横穴墓群は、志布志町内で最も広い平坦面をもつ町原台地から南へ延びた舌状台地の比高差約45 mの海食崖に位置する（標高約10 m）。

明治42(1906)年、旧制志布志中学校の敷地を整地するために学校の北方にある丘陵を削った際に発見された。その際、数基の横穴が確認され、土器が10数点見つかっている。横穴内には、人骨が残っているものもあったとされる。規模は、入口は幅5尺（約1.5 m）、奥行7尺（約2.1 m）、高さ6尺（約1.8 m）とされる。

その後、上村俊雄氏らにより昭和39(1964)年と昭和45(1970)年に横穴が2基発見され、横穴墓の可能性が指摘されていた（志布志町誌編集委員会 1972）。

その横穴2基は、平成24(2012)年、市道改良工事に伴い発掘調査が行われた（志布志市教委 2013）。その結果、2基の横穴は、古墳時代の横穴墓の可能性は低いと判断されている。また、六月坂一帯に横穴墓が現存しているの可能性も低いとされた。

横穴墓出土資料として現在伝わっているものは、土師器4点と須恵器5点である(第12図)。土師器は全て坏で、平底となるものである。外底面に「×」字状のヘラ記号を施すものもある。須恵器は、坏蓋3点と坏身2点である。7以外の4点は TK217 ～ 46 型式（7世紀前～後半）、7は8世紀前半頃に位置づけられる（志布志市教委 2013）。

これら出土資料は、口縁部に一部欠損はあるが、ほぼ完形品であり、集落遺跡等で出土したものではなく、横穴墓の出土遺物であった蓋然性は高い。

その被葬者について、宮崎平野部から派遣された有力者であった可能性が指摘されている（橋本 2012）。

8　小結

志布志湾沿岸地域は、鹿児島県内において最も多くの古墳が造られた地域である。その北側に位置する志布志地域は、志布志湾沿岸の他地域にみられない特徴がある。

6世紀代の古墳として稀有な存在である小牧1号墳や集落内の溝を掘りこんで構築された7世紀代の地下式横穴墓の存在（春日堀地下式横穴墓、安良地下式横穴墓）、そして県内では二例しか認められていない横穴墓の存在（六月坂横穴墓群）である。

特に小牧1号墳や六月坂横穴墓群の存在は、後に日向国諸県郡に属することになるこの地域を考える上で注目される。

（引用・参考文献）

有明町誌編さん委員会 1980『有明町誌』

上村俊雄 1970「飯盛山古墳とその周辺」『九州考古学』39・40　九州考古学会

上村俊雄 1977「志布志湾沿岸の古墳文化」『南日本文化』10　鹿児島短期大学南日本文化研究所

上村俊雄 1984「鹿児島県」『古代学研究』102　古代学研究会

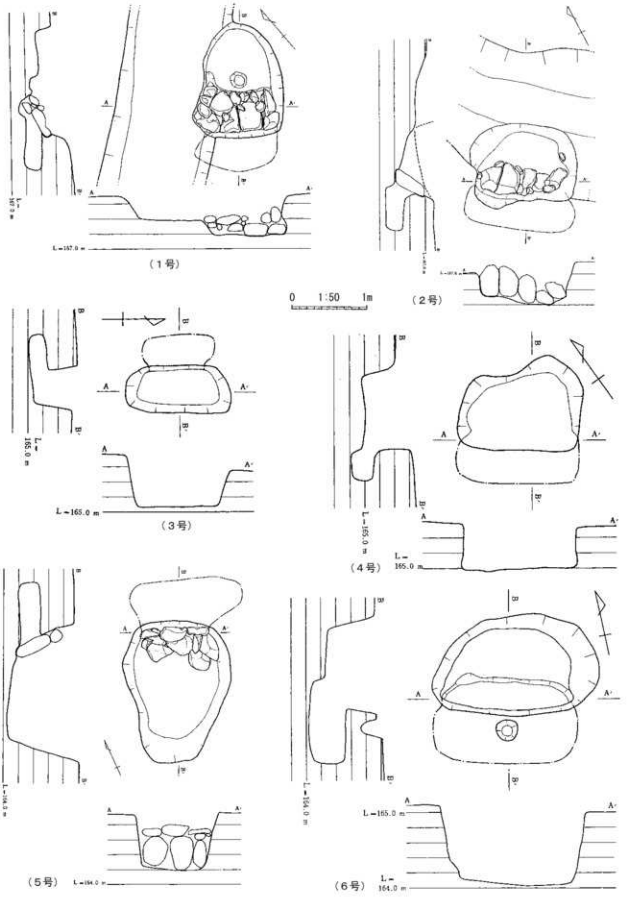
（公財）鹿児島県埋蔵文化財調査センター 2020 a『永吉天神段遺跡5』（公財）鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書27

（公財）鹿児島県埋蔵文化財調査センター 2020 b『春日堀遺跡1』（公財）鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書32

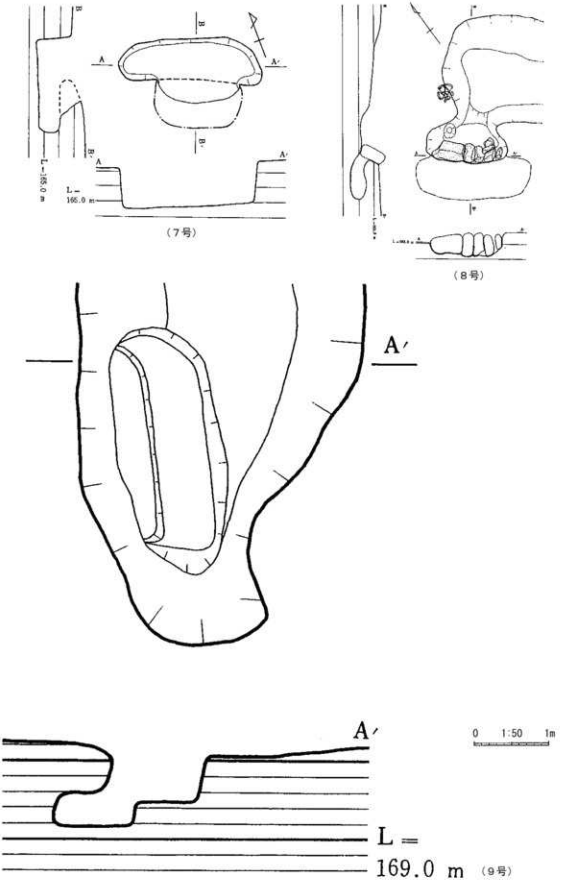
（公財）鹿児島県埋蔵文化財調査センター 2020 c『安良遺跡』（公財）鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書34

志布志市教育委員会 2013『(伝) 六月坂横穴墓』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書10

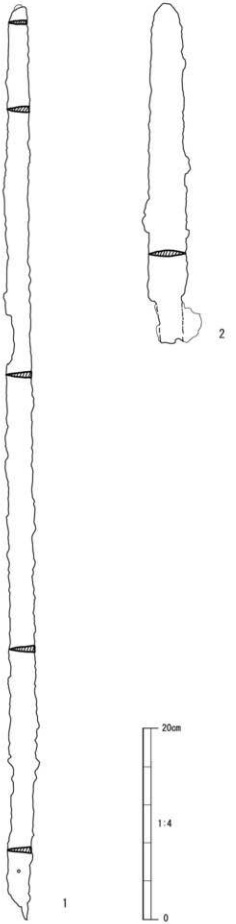
志布志町教育委員会 2001『飯盛山古墳』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書29



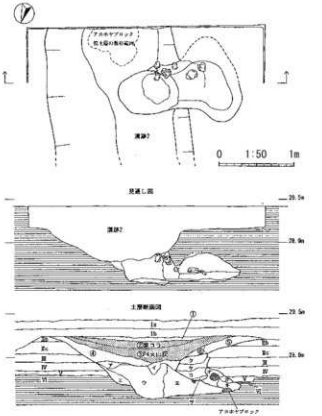
第７図　京ノ峯１～６号地下式横穴墓（松山町教委 1993 から引用）



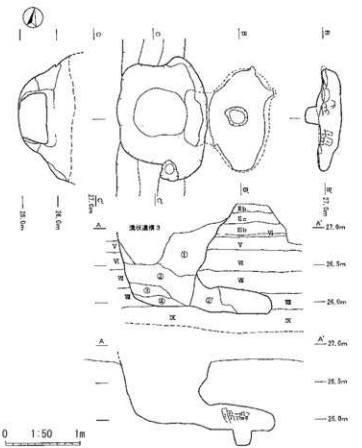
第８図　京ノ峯７～９号地下式横穴墓（松山町教委 1993 から引用）



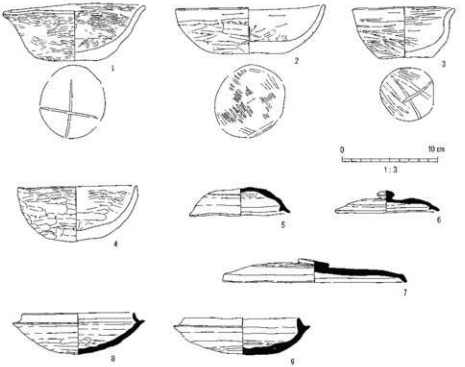
第９図　馬場地下式横穴墓群出土遺物



第 10 図　春日堀地下式横穴墓（（公財）鹿県埋調セ 2020b から引用）



第 11 図　安良地下式横穴墓（（公財）鹿県埋調セ 2020c から引用）



第 12 図　六月坂横穴墓出土遺物（志布志市教委 2013 から引用）

志布志町誌編集委員会 1972『志布志町誌』上巻
瀬戸口望 1987「飯盛山古墳に関する旧資料について－故島戸貞良先生の発表論文」『鹿児島考古』21　鹿児島県考古学会
橋本達也 2008「第 2 章古墳時代墓制としての地下式横穴墓」『大隅串良岡崎古墳群の研究』 鹿児島大学総合研究博物館
橋本達也 2010「九州南部の首長墓系譜と首長墓以外の墓制」『九州における首長墓系譜の再検討』 九州前方後円墳研究会
橋本達也 2012「九州南部と古墳文化」『古墳時代の考古学』7　同成社
橋本達也・藤井大祐・甲斐康大 2008『大隅串良　岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告 No. 3
松山町教育委員会 1993『京ノ峯遺跡』松山町埋蔵文化財発掘調査報告書 7

第 4 節　原田古墳群について

原田古墳群は、志布志湾に注ぐ田原川の河口から約 6 ㎞上流東岸の、「菱田原」と呼ばれるシラス台地の縁辺部（標高約 60 m）に位置する。

周辺は昭和 38(1963) 年 12 月から昭和 41(1966) 年 11 月の間に行われた土地改良整備事業によって区画された茶畑などの畑地が広がっている。

市指定の史跡である原田古墳は、平成 22・23 年度に、鹿児島国際大学の大西智和教授が中心となって測量調査が実施された（大西・鐘ヶ江・松崎 2012)。

1 号地下式横穴墓は昭和 54(1979) 年 11 月に不時発見に伴い発掘調査が行われた（鹿児島県教委 1980)

ところで、原田古墳群は現状において、円墳の原田古墳 1 基と地下式横穴墓 3 基からなる。しかし、原田古墳群はこれまで様々の名称で呼称され、さらにその内容も色々変遷がみられた。ここで、その履歴について説明したい。

1　原田古墳群の履歴

昭和 42(1967) 年、文化財保護委員会により刊行された『全国遺跡地図（鹿児島県）　史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地図』には、「大塚殿古墳」と記されている。所在地は「有明町原田字大塚」である。地図には、シラス台地下の原田小学校のそばにドットが落ちている。

この『全国遺跡地図（鹿児島県)』には、昭和 36(1961) 年度の鹿児島県教育委員会による分布調査結果が掲載されていることから、昭和 36 年時点で原田古墳群が埋蔵文化財包蔵地として初めて認識されたことが分かる。

昭和 48(1973) 年、鹿児島県教育委員会が刊行した『鹿児島県市町村別遺跡地名表』と『鹿児島県遺跡地図』には、有明町原田に所在する古墳として、「大塚Ａ古墳」（有明町原田大塚)、「大塚Ｂ古墳」（有明町原田大塚)、「原田古墳」（有明町原田小学校上)、「坂ノ上 1 号墳」（有明町原田君安坂ノ上)、「坂ノ上 2 号墳」（有明町原田君安坂ノ上）の 5 基が掲載されている。全て円墳とされる。地図には、原田小学校のそばにドットが落ちている。

これらの詳細について、大塚Ａ古墳は「盗掘されてい

る安山岩石棺（長さ 1.3 m・高さ 1.2 m）小石６ケ。長径 20.0 m、高さ 4.5 m」と記載されている。

大塚Ｂ古墳は「やや方形化。長径 10.0 m、高さ 1.3 m」と記載されている。

原田古墳は「供養樹・石坂（坂石の誤りか：編者註）等今はなし」と記載されている。坂ノ上１号墳は「出土品なし、小円墳」と記載されている。坂ノ上２号墳は「小円墳」と記載されている。

昭和 52(1977) 年、鹿児島県教育委員会が刊行した『鹿児島県市町村別遺跡地名表』には、昭和 48 年と同じ情報が掲載されている。さらに、原田古墳群に関係する可能性があるものとして「大塚古墳」（有明町東下）が登場するが、方墳とされる情報以外、詳細は不明である。

昭和 59(1984) 年、鹿児島県教育委員会が刊行した『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報－昭和 58 年度－』には、「大塚古墳群」として掲載されている。

大塚Ａ古墳、大塚Ｂ古墳、原田古墳、坂ノ上１号墳、坂ノ上２号墳、そして大塚古墳が統合され、円墳５基と方墳１基の内訳となっている。地図には、現在の原田古墳の場所にドットが落ちている。

現在は、埋蔵文化財包蔵地の名称として「原田古墳群」となっている。

現在呼称している原田古墳は、これまで登場してきた中でどの古墳に該当するのかを考えてみたい。

昭和 48 年刊行の『鹿児島県市町村別遺跡地名表』に記された古墳の詳細から判断すると、長径に大きな齟齬があるものの、石棺の記載もあることから、「大塚Ａ古墳」に該当する可能性が高いのではないだろうか。

昭和 38(1963) 年の航空写真には、原田古墳南東側にやや方形の繁みが存在する（第 14 図下）。これが「やや方形化」とされる「大塚Ｂ古墳」に該当する可能性もあろう。

他の古墳については、詳細不明である。昭和 55(1980 年）に刊行された有明町誌には、原田古墳の紹介にとどまっており、それ以外の古墳については触れられていない。原田古墳以外は、過去に行われた土地改良整備事業などにより既に削平されている可能性が高いのではないだろうか。

2　原田１号地下式横穴墓（第 13 図）

１号地下式横穴墓は、昭和 54(1979) 年 11 月に不時発見により調査されている（鹿児島県教委 1980）。畑地で土地所有者がイモ穴を掘った際に発見された。

１号墓は原田古墳の南西に位置し、墳裾から約 22 m 離れた場所にある。主軸が北東－南西方向を向き、玄室が北東部にある。全長は 3.9 m を測る。

竪坑は、幅 2.1 m、長さ 1.4 m の長方形を呈し、主軸方向に横長となる。深さ 1.1 m を測る。

羨道は、幅 0.6 m、高さ 0.6 m、長さ 0.5 m を測る。専門の閉塞の痕跡は認められないものの、玄室内への流入土が極めて少ないことから、木板を用いた板閉塞と推定されている。

玄室は、縦長の妻入り家形である。奥行 2.2 m、幅は 0.9 ～ 1.3 m の台形状を呈し、高さ 0.7 m を測る。

玄室内には軽石製組合式石棺が納められている。石棺は、蓋石が５枚、側壁は 10 枚と９枚、小口がそれぞれ１枚ずつの計 26 枚の板石が使用されている。底石はなく、軽石の削り屑が多量に敷き詰められて、屍床面をなしている。

石棺内には人骨が認められた。良好な保存状態ではなかったが、腓骨・肋骨・大腿骨・骨盤・上腕骨・前腕骨・脊柱等が残っていた。人骨の残存状態から伸展葬と推定されており、鑑定結果から成人女性である。

副葬品は、石棺内において鉄製の刀子が１点見つかっている（第 13 図１）。今回の報告書作成にあたり、再実測を行った。

小型の刀子で、刃部先端を欠損している。残存長 7.9 ㎝、刃部長 5.1 ㎝（復元長 5.4 ㎝）、茎部長 2.8 ㎝を測る。厚さは、刃部背側の最も厚いところで 0.4 ㎝、茎部最大厚は 0.3 ㎝である。重さは現状で 11.3 g である。

関部に最大幅をもち、幅 1.2 ㎝を測る。関部は片関で、ナデ関である。

茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎尻は斜めの直線となる。

鞘に由来する有機質は認められず、把に由来する有機質もはっきりしない。

（引用文献）

有明町誌編さん委員会 1980『有明町誌』

大西智和・鍵ヶ江賢二・松崎大嗣 2012「志布志市有明町原田古墳の測量調査」『鹿児島考古』42　鹿児島県考古学会

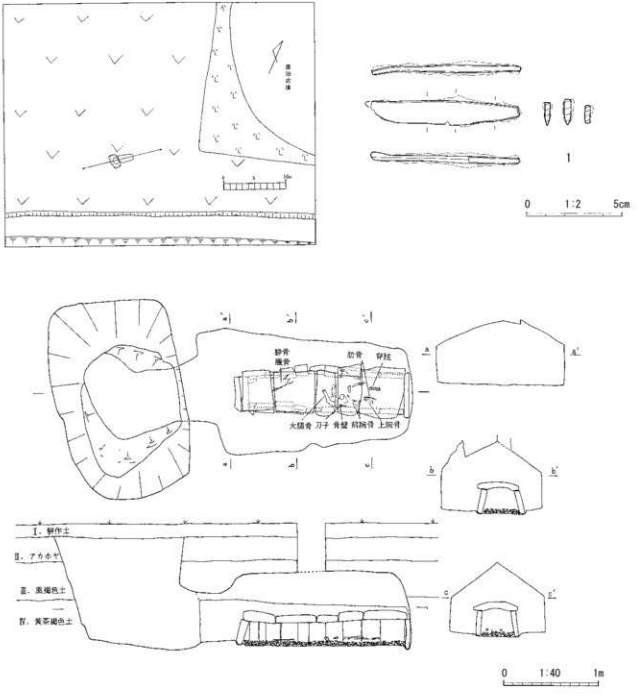
鹿児島県教育委員会 1973『鹿児島県市町村別遺跡地名表』

鹿児島県教育委員会 1973『鹿児島県遺跡地図』

鹿児島県教育委員会 1977『鹿児島県市町村別遺跡地名表』

鹿児島県教育委員会 1980『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（13）

鹿児島県教育委員会 1984『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報－昭和 58 年度－』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（29）



第 13 図　原田 1 号地下式横穴墓関係資料（遺物実測図以外は鹿児島県教委 1980 から引用）

第 14 図　原田古墳群周辺航空写真（１）　　国土地理院ウェブサイトより

第 15 図　原田古墳群周辺航空写真（２）　　国土地理院ウェブサイトより

第３章　調査の方法

第１節　発掘調査の方法

１　発掘作業の方法

原田古墳の墳丘形態や規模、墳丘の構築方法、周溝や埴輪・葺石の有無、張り出し部の性格・規模などを知る手がかりを得ることを目的として、墳丘や墳裾、そして墳丘外にトレンチを設定した。

レベルは、測量調査時に設置した座標であるＴ－１杭（標高 63.906 m）とＴ－２杭（標高 63.723 m）を用いた。

発掘作業は、人力（鋤簾やねじり鎌）による掘り下げを行った。出土遺物は、番号を付して平板取り上げを行った。番号を付したものは、86 点である。盗掘坑出土のものは、一括取り上げしたものもあり、それらも合計すると 120 点となる。

調査状況などの写真撮影に使用したフィルムは、35mm 判の白黒・カラーリバーサルである。そしてデジタルカメラも使用した。写真撮影は、市教委職員と大西智和教授が行った。

平面図や土層断面図は、手測りによる実測を行い、盗掘坑内の礫出土状況は、三次元計測も行った。

２　整理作業の方法

洗浄について、土器と鉄器はブラシを用いて土の除去を行った。

注記は、遺跡名を表す「原田」または「ハラダ」を頭に、「調査時数」「トレンチ名」「取上番号」の順で記入した。

土器の接合は、土師器と須恵器に分類した後実施したものの、接合するものは無かった。その後、報告書掲載遺物の選別を行い、実測・拓本・トレースを行った。

実測遺物には、実測番号を付して作業管理を行った。遺物のトレースは、ロットリングペンを用いた。遺構図は、デジタルトレースを行った。

第２節　層位

基本層位は、平成 29 年度に実施した原田２・３号地下式横穴墓の調査時のものを参考にした。地層の詳細は、以下のとおりである。

地形は北東方向へ緩やかに高くなっていく。

Ⅰ層：黒褐色（10YR2/2）のシルト質土。表土である。層厚は約 10cm。

Ⅱ層：黒色（10YR2/1）のシルト質土。層厚は約 30 ㎝。

Ⅲ層：極暗褐色（7.5YR2/3）のシルト質土で、締まりがある。御池火山灰を含む。層厚は約 10 ㎝。

Ⅳ層：黒褐色（5YR2/1）のシルト質土で、締まりがある。層厚は約 15 ㎝。

Ⅴ層：黒褐色（7.5YR3/1）のシルト質土で、締まりがある。池田降下軽石を含む。層厚は約 15 ㎝。

Ⅵ層：明黄褐色（7.5YR5/8）のシルト質土で、締まりがある。アカホヤ火山灰層である。下部には黄橙色軽石を多く含む。層厚は約 40 ㎝。

Ⅶ層：暗褐色（7.5YR2/3）のシルト質土で、硬質である。層厚は約 50cm。

Ⅷ層：黄褐色（10YR5/8）のシルト質土で、かなり硬質である。鬼界火山灰層である。層厚は約 20 ～ 25 ㎝。

Ⅸａ層：にぶい赤褐色（5YR4/4）の粘質土で、締まっている。いわゆるチョコ層である。層厚は約 30 ㎝。

Ⅸｂ層：明黄褐色（10YR6/6）の弱粘質土。下位ほど粘性が弱くなる。いわゆるチョコ層である。層厚は約 20 ㎝。

Ⅹ層：明黄褐色（2.5Y6/6）の砂質土。シラスである。

第４章　調査の成果

第１節　遺構

１　墳丘の現状

原田古墳の発掘調査開始時点では、測量調査（大西ほか2012）をもとに墳丘の規模は径40～47ｍ、地表面からの高さは5.0～6.3ｍの円墳状を呈することが把握されていた（第16図）。

墳頂は、直径約16.0～18.5ｍの平坦部を有する。墳頂平坦面の中心部よりやや南側に、東西の長さ約11ｍ、南北方向の長さ2.0～3.6ｍの、「へ」の字形を呈する落ち込みがあり、落ち込みの周囲に大型の石材が露出していた（図版５－７・８）。

このような状況から埋葬の主体部は、盗掘を受けていることが予測された。

主体部を除く墳丘自体は、大きな削平を受けていないものの、墳裾部は周辺の畑の造成に伴い削平を受けていることが推測された。

一方、南西側には、三角形状の張り出し部を有することが注意された（図版５－６）。張り出し部は、円墳の造り出しとなる可能性があるが、長さは最長部で約4.6ｍ、幅約14.4ｍに及び、高さは地表面より0.5～0.6ｍほどを測る。

このような現状をふまえ、１～13のトレンチを設定した（第17図）。最初に墳丘の形態や盛土の構築技術、およびの三角形状の張り出しの性格の把握を目的として、墳丘の南北方向に貫く形でトレンチを設定した（１・３・４トレンチ）。また墳頂上の東西方向にもトレンチを設定した（５・６トレンチ）。さらに古墳の形態や範囲を確定させるためには、周溝などの施設を確認することが不可欠であるため、墳丘の裾部にもトレンチを設けた（７・８・９・11トレンチ）。

主体部（埋葬施設）の調査では、墳丘頂部のトレンチを拡張して墓壙を検出するとともに、盗掘坑の埋土を除去することで、埋葬施設の状況を把握することとした。そのため、墳丘頂部のトレンチは複数設定し（10・12・13トレンチ）、一部のトレンチは当初の形状より拡張させている。

トレンチの掘削後は土層の観察・記録を行い、遺物取り上げおよび出土地点の記録を行った後に掘削土を土嚢に詰めてトレンチに埋め戻した。

以下、各トレンチの状況について説明する。

２　墳丘の構造

１トレンチ

墳丘の頂部より南側墳裾に至る南北方向に、約28.0×1.0ｍのトレンチを設定し、墳丘の盛土の構築過程の観察および南西部の三角形状の張り出し部の検討を行った（第18図）。

１トレンチの上部では、表土下にシラスに類似した灰白色の砂層が確認されていた。これは当初盛土の工程を構成するものと認識していたが、墳頂部の３トレンチにも同様に灰白色砂層が続き、４トレンチや５トレンチでも検出され、面的な広がりを示している。

層位の検討の結果、灰白色の砂層は大正３（1914）年に桜島から噴出した大正火山灰の堆積層であると推測するに至った。大正火山灰の堆積は、１トレンチでは墳丘下部まで続いている。

大正火山灰層の下位の層は、流土や本来の墳丘の表土の可能性のある層が堆積しており、その下には墳丘盛土とみられる層を検出した。１トレンチの墳丘上部と中部の盛土は、幅0.6ｍのベルトを残し、サブトレンチを設定して層位を検討した。

墳丘の上部では、アカホヤ層（Ⅵ層）土やⅥ層土（以下、「ローム」とする）を多く含む盛土を構築し、その上にアカホヤ層土をわずかに含む土を積む盛土工程をとったと判断した。

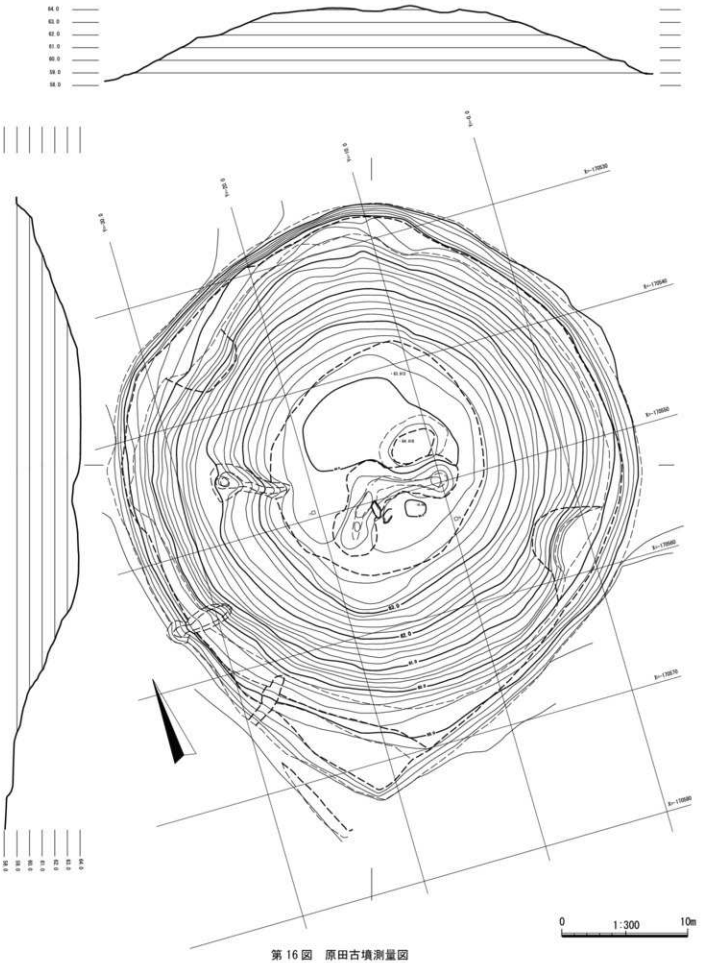
アカホヤ層とローム層は当該地域の基盤をなす火山灰起源の層であり、墳丘上にアカホヤ層やローム層のブロックが確認される事実は、地山を掘削した際の土を人工的に盛り上げたことの証左となる。アカホヤ層土やロームブロックを含む土は、他のトレンチでも検出されることから、墳丘盛土の基盤をなす要素の一つであることが明らかになった。

１トレンチ墳丘中部に関しては、表土および大正火山灰より下位に全体的に黒色層が続いており、墳丘上部からの流土が厚く堆積する状況を示唆する可能性も考えたが、層位を検討した結果、黒色土の粘性やしまり具合に差異が認められた。

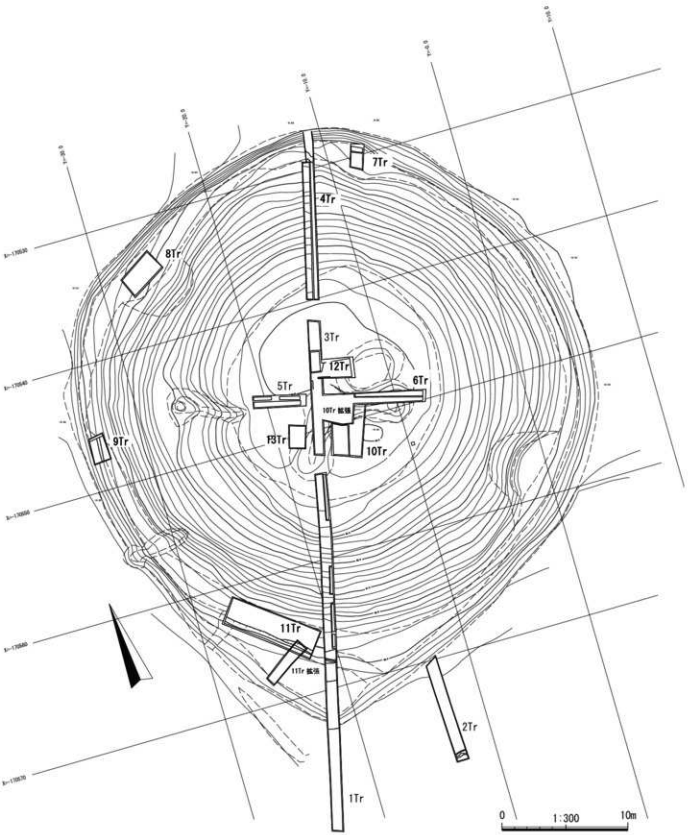
全体に黒色を呈するシルト質の砂層が厚く堆積するが、黒色のしまりの強い土の間に黒色のしまりの弱い土が充填される状況が確認され、通常の水平堆積とは異なる様相を示している（17～49層）。したがって、この黒色土堆積は人工的な盛り土の工程を示すと判断した。

しまりの強い土の間にしまりの弱い土がはさまれる層位は、１トレンチ墳丘中部北側では上下２層にわたって認められた。その上層は、しまりの弱い層が下部まで続いていた。これは盛土の途中の整地作業、あるいは盛土が流出し表土化した層の可能性も考えられるが、この解釈はさらに検討を要する。

墳丘墳裾の盛土下部は、１トレンチ中部と同様にしま



第 16 図　原田古墳測量図



第 17 図　トレンチ配置図

りの強い土の間にしまりの弱い土が充填される層位が確認された。通常みられる水平の堆積ではなく、縦に積み上げた層もあり、墳丘盛土の崩落を防ぐための土台に関連する造作ととらえることができるかもしれない。同様な層位は、4トレンチ北側の下部でも確認できる。

1トレンチ墳丘墳裾近くの南側の壁面では、サブトレンチの最下部に池田降下軽石を含む層（V層）が検出され、その下位にはアカホヤ層が広がっていた。この2つの層は、地山に相当する層であるが、池田降下軽石含有層は非常に薄く、墳丘造成時に整地作業などによってカットされた可能性がある。

墳裾部外側付近では、アカホヤ層がカットされ、段が形成されていた（図版7－5・6）。この段はアカホヤ層を削り、アカホヤ層下位のローム層にまで及ぶとみられ、発掘前の測量調査の際に観察されたテラス状平坦部とほぼ対応している。4トレンチでも墳裾外側で同様な段が検出されたことから、アカホヤ層が意図的に除去されたと判断される。反対側の段の立ち上がりがみられる場合は周溝となる可能性があるが、削平のため不明である。

なお、段に露出しているアカホヤ層とローム層の境のレベルは、58.50 mである。段の外側のローム層にも弱い傾斜が認められ、何らかの造成によるものであると推測される。

1トレンチ墳丘外部では、盛土や池田降下軽石含有層、アカホヤ層は観察されず、シルト質粘質土が水平に堆積する状況を呈し、基盤はアカホヤ下位のローム層である。この部分は、測量調査の段階では墳丘に接続して三角形状を呈する張り出し（造り出し）が認められることから、古墳に関連する施設の可能性も考えられた。土層の観察によると、この高まりはローム層の上に堆積するシルト質粘質土が削られることによって形成されたと判断される。また、斜面の堆積からは、近世のすり鉢が出土している。

これらの点を勘案すると、この張り出し状の高まりは、近世以降の開墾に伴う造成の結果である可能性がある。また外側の土坑（SK01）は掘り下げを行っていないが、古墳とは性格の異なる遺構であろう。

1トレンチ南側端部では、アカホヤ層が再び検出されることから（図版7－8）、1トレンチ墳丘外ではアカホヤ層を大きく除去するような造成が行われたことがうかがえる。トレンチ南側端部ではアカホヤ層は薄く、下部にアカホヤ層とローム層の境が検出された。トレンチ南端部のアカホヤ層とローム層の境のレベルは58.0 mであり、墳丘端部の段で露出しているレベルより60cm程度下に位置している。

この点から勘案すると、現在畑が広がり平坦な古墳周辺の地形は、本来は南から古墳に向かってゆるやかに傾斜して上がっていたことが推測できる。またこのトレンチ南端部付近のアカホヤ層を広く除去し平坦化する造成は、近世以降の時期に畑の開墾などにともなって行われた可能性が高い。

なお、墳丘には段地築や葺石は確認できなかった。また他のトレンチでは須恵器の破片などが出土しているが、本トレンチでは須恵器など墳丘祭祀に関わる遺物は出土していない。

2トレンチ

1トレンチと同様に墳丘の形状や周溝を確認するために約8.5m×1.0mのトレンチを設定した。掘り下げた結果、1トレンチ南側同様に全体に削平を受け、アカホヤ層下位のローム層が露出しており、墳丘の形成に関する情報は得られなかった（図版8－1・2）。

4トレンチ

4トレンチは、1トレンチおよび3トレンチの延長線上、墳頂北側から墳丘裾部にかけての位置に約13.5×1.0 mトレンチを設定した（第19図）。幅0.5 mのベルトを残し、サブトレンチを掘削して盛土を検討した。表土層の厚さは10cm～15cmほどで、下層より盛土を検出した。

墳頂付近ではロームブロックを多く含む盛土層が堆積し、アカホヤ層土やロームブロックを含まない層が上に堆積している状況を確認できた。ただし、樹木の攪乱もあり、構造を十分に把握するには至っていない。

また墳頂付近では、斜面の盛土層を覆う形で盛土が堆積しており（6・8・9・10層）、埋葬施設構築後の天井の封土設置を示す可能性がある。

墳丘上部の斜面では、アカホヤブロックを含みしまりのある層（24層）の上に暗赤褐色のしまりのあるシルト質砂層（15層）が土留め状に積まれ、墳頂付近のローム ブロックを含む層の間に盛土が充填されている。

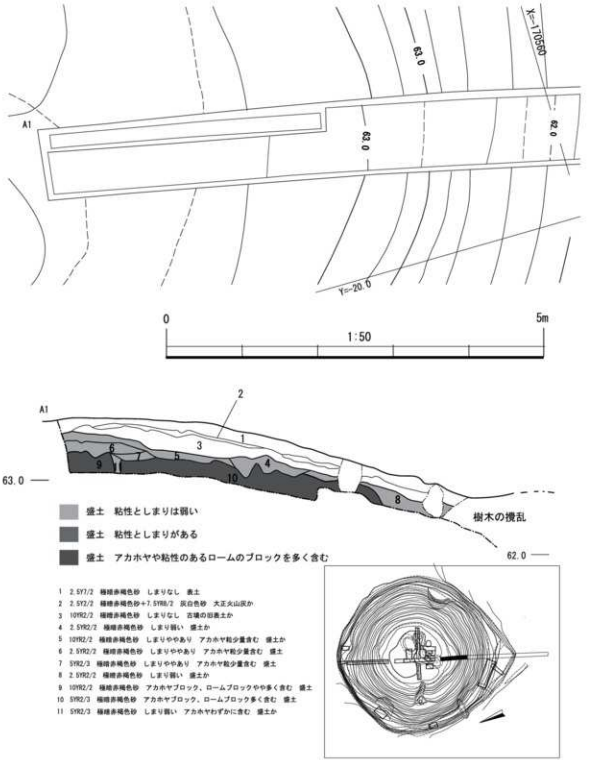
また4トレンチ墳丘下部では、黒色シルト質砂層が堆積し、墳丘傾斜に沿って斜め堆積した様相もみられる（25～32層）。25層や32層は、盛土の崩落を防ぐための造作の可能性も指摘できよう。

トレンチ最下部では、薄く池田降下軽石が堆積しており、盛土が始まる墳裾も確認した。

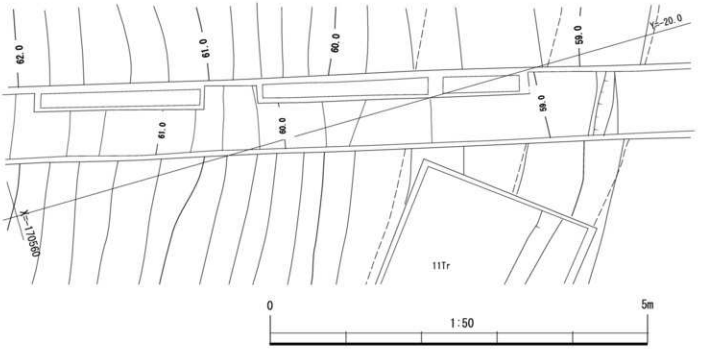
1トレンチの墳丘下部南側の墳裾付近では、アカホヤ層をカットしてローム層までおよぶ段が検出されたが、4トレンチ南側でも同様の段が認められた。この段は、1トレンチと同様にテラス状平坦部と対応している。

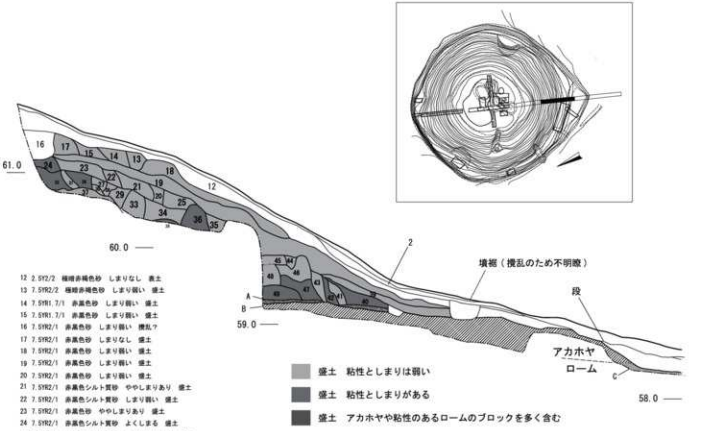
段の上端のレベルは、1トレンチが58.68 m、4トレンチが60.27 mである。また、4トレンチ段に露出するアカホヤ層とローム層の境のレベルは60.24 mであり、1トレンチに露出するアカホヤ層とローム層の境界レベルより1.7 mほど高い。

この点から、段の形成は、同じレベルにそろえて周囲



第 18 － 1 図　1 トレンチ墳丘上位　平面・土層図

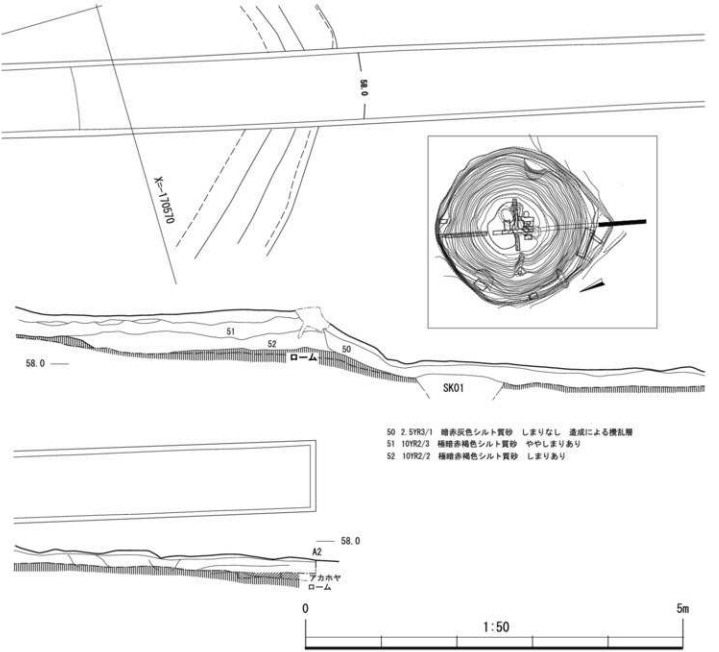




12 2.5YR2/2　極暗赤褐色砂　しまりなし　表土
13 7.5YR2/2　極暗赤褐色砂　しまり弱い　盛土
14 7.5YR1.7/1　赤黒色砂　しまり弱い　盛土
15 2.5YR1.7/1　赤黒色砂　しまり弱い　盛土
16 7.5YR2/1　赤黒色砂　しまり弱い　撹乱？
17 7.5YR2/1　赤黒色砂　しまりなし　盛土
18 7.5YR2/1　赤黒色砂　しまり弱い　盛土
19 7.5YR2/1　赤黒色砂　しまり弱い　盛土
20 7.5YR2/1　赤黒色砂　しまり弱い　盛土
21 7.5YR2/1　赤黒色シルト質砂　ややしまりあり　盛土
22 7.5YR2/1　赤黒色シルト質砂　しまり弱い　盛土
23 7.5YR2/1　赤黒色砂　ややしまりあり　盛土
24 7.5YR2/1　赤黒色シルト質砂　よくしまる　盛土
25 7.5YR2/1　赤黒色シルト質砂　ややしまりあり　盛土
26 7.5YR2/2　極暗赤褐色シルト質砂　しまりあり　盛土
27 7.5YR2/1　赤黒色シルト質砂　しまり弱い　盛土
28 7.5YR2/1　赤黒色シルト質砂　しまり弱い　盛土
29 7.5YR2/1　赤黒色シルト質砂　しまり弱い　アカホヤ粒わずかに含む　盛土
30 7.5YR2/2　極暗赤褐色砂　しまり弱い　盛土
31 7.5YR2/1　赤黒色シルト質砂　よくしまる　盛土？
32 7.5YR2/1　赤黒色シルト質砂　粘性あり　よくしまる　盛土
33 7.5YR2/2　極暗赤褐色砂　よくしまる　アカホヤ粒をわずかに含む　盛土
34 7.5YR2/1　赤黒色シルト質砂　しまり弱い　盛土
35 7.5YR1.7/1　赤黒色砂　しまり弱い　盛土
36 7.5YR2/1　赤黒色シルト質砂　粘性あり　よくしまる　盛土
37 7.5YR2/2　極暗赤褐色シルト質砂　ややしまりあり　アカホヤブロック少量含む　盛土
38 7.5YR1.7/1　赤黒色シルト質砂　しまりあり　粘性あり　盛土
39 7.5YR1.7/1　赤黒色砂　しまり弱い　盛土
40 2.5YR2/1　赤黒色シルト質砂　粘性あり　よくしまる　盛土
41 10YR1.7/1　赤黒色シルト質砂　しまり弱い　盛土
42 10YR1.7/1　赤黒色シルト質砂　よくしまる　盛土
43 10YR1.7/1　赤黒色シルト質砂　しまりなし　盛土
44 7.5YR1.7/1　赤黒色シルト質砂　ややしまりあり　アカホヤ粒子わずかに含む　盛土
45 10YR1.7/1　赤黒色シルト質砂　しまり弱い　盛土
46 10YR1.7/1　赤黒色シルト質砂　しまり弱い　盛土
47 10YR1.7/1　赤黒色シルト質砂　よくしまる　盛土
48 10YR1.7/1　赤黒色シルト質砂　しまり弱い　盛土
49 10YR1.7/1　赤黒色シルト質砂　よくしまる　アカホヤ粒子わずかに含む　盛土

A　表採下敷石層
B　アカホヤ層
C　ローム層

第18－2図　1トレンチ墳丘中位　平面・土層図



第18－3図　1トレンチ墳丘下位　平面・土層図

を掘削するように意図したものではなく、アカホヤ層を除去してローム面にまで達したところまで掘削するように意図したこと、すなわち土壙の特性に合わせて造成を行った結果であることを指摘できる。

段は溝状をなす場合、周溝となる可能性があるが、段の反対側の立ち上がりは、造成による削平を受けカットされており周溝になるかは不明である。

4トレンチのアカホヤ面の段のラインは、3次調査でトレンチを拡張する際トレンチ内で曲がっていることが確認できた。このラインは、北西方向に屈曲するようである（図版13－2）。

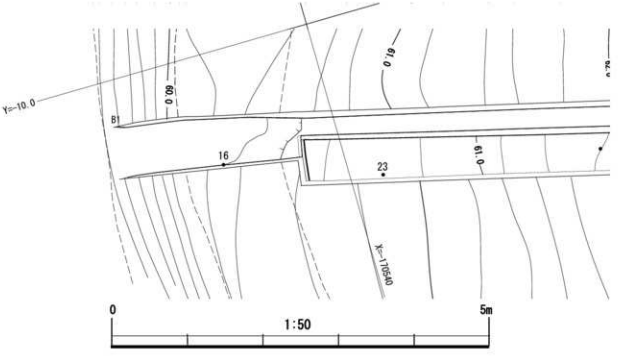
したがって、墳丘に付属する張り出しなどが存在した可能性もあるが、墳丘端部は削平を受けており、段の屈曲と墳丘形態との関連は判然としない。

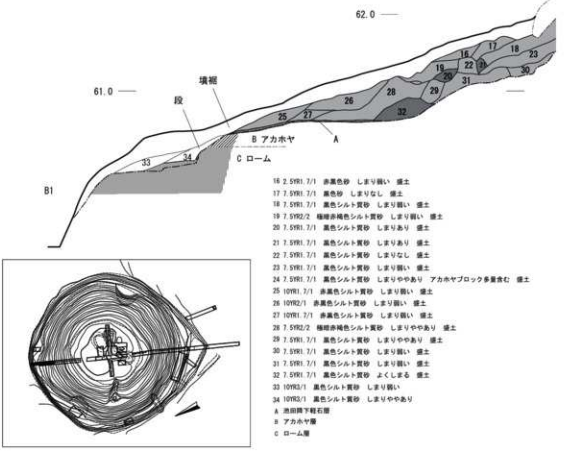
トレンチ墳裾付近の表土から、須恵器片が3点出土している。

7トレンチ

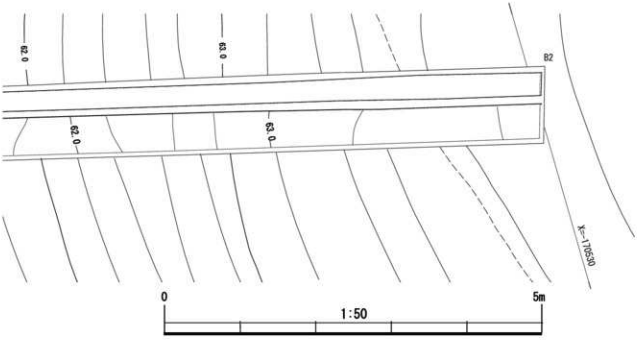
1トレンチと4トレンチでは、アカホヤ層をカットする段が検出された。この段の形成の続きを把握するため、7・8・9トレンチを設定した。

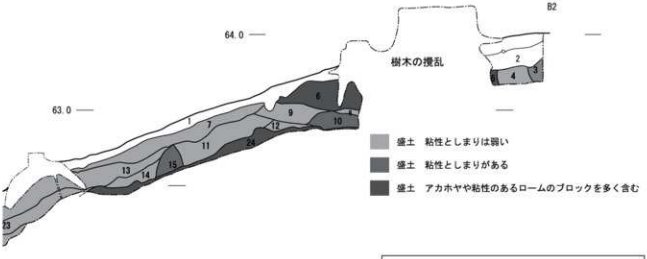
7トレンチは、約2.0×1.0mで、4トレンチ端部付近の東側に隣接するように設定した（第20図、図版13－3）。段はアカホヤ面より検出され、ローム層に及ぶ。



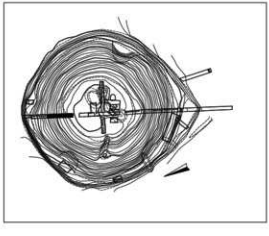


第19－1図　4トレンチ墳丘下位　平面・土層図（ドットは遺物出土地点）

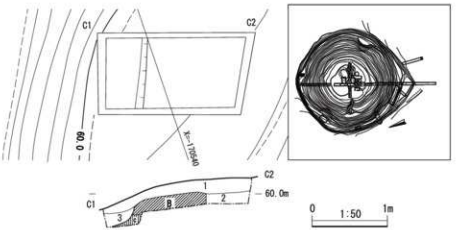




1　2.5Y7/2　極暗赤褐色砂　しまりなし　表土
2　7.5YR1.7/1　赤黒色シルト質砂　しまり弱い　表土
3　7.5YR2/2　極暗赤褐色シルト質砂　しまりあり　ロームブロック多く含む　盛土
4　7.5YR2/3　極暗赤褐色シルト質砂　ややしまりあり　盛土
5　7.5YR2/1　赤黒色シルト質砂　しまり弱い　ロームブロック多く含む　盛土
6　7.5YR2/1　赤黒色シルト質砂　しまり弱い　ロームブロック多く含む　盛土
7　10YR2/1　赤黒色砂　しまり弱い　盛土（表土の可能性も）
8　10YR2/1　赤黒色砂　しまり弱い　盛土（表土の可能性も）
9　10YR2/2　極暗赤褐色砂　しまり弱い　盛土
10　7.5YR2/1　赤黒色シルト質砂　よくしまる　ロームブロック多く含む　盛土
11　7.5YR2/1　赤黒色シルト質砂　よくしまる　ロームブロック多く含む　盛土
12　10YR2/1　赤黒色シルト質砂　アカホヤ粒少量含む
13　10YR1.7/1　赤黒色シルト質砂　しまり弱い　盛土
14　10YR1.7/1　赤黒色シルト質砂　しまりややあり　盛土
15　7.5YR2/2　極暗赤褐色シルト質砂　しまりあり

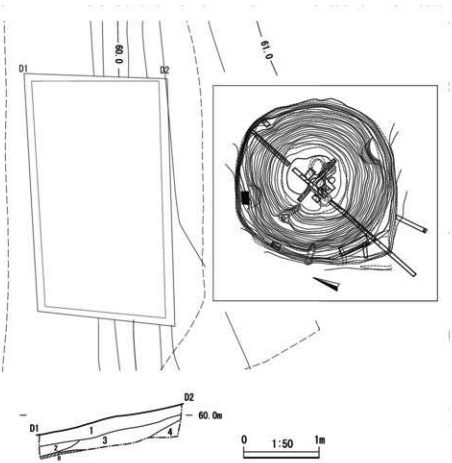


第19－2図　4トレンチ墳丘上位　平面・土層図（ドットは遺物出土地点）



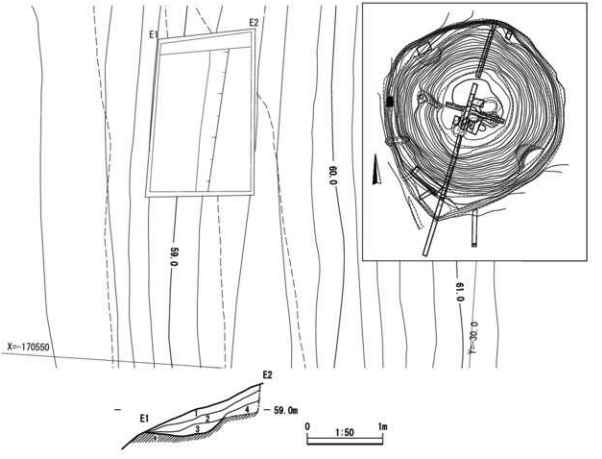
1　7.5YR2/3　極暗褐色シルト質砂　しまり弱い　表土
2　5YR2/4　極暗赤褐色シルト質砂　しまり弱い　アカホヤ粒子少量含む　復乱にともなう層
3　7.5YR2/1　黒色シルト質砂　しまり弱い　アカホヤ粒子少量含む
B　アカホヤ層
C　ローム層

第 20 図　7 トレンチ　平面・土層図



1 5YR2/1　黒褐色シルト質砂　しまりなし　表土
2 5YR2/1　黒褐色シルト質砂　しまり弱い
3 5YR1.7/1　黒色シルト質砂　しまり弱い　アカホヤ、大正火山灰粒子少量含む
4 10YR2/1　黒色　シルト質砂　しまり弱い　盛土か
B アカホヤ層　地山

第 21 図　8 トレンチ　平面・土層図



第 22 図　9 トレンチ　平面・土層図

4 トレンチで検出された段は、墳丘東側にも続いていると推測される。

トレンチの表土から、須恵器片が 1 点出土している。

8 トレンチ

4 トレンチの段落ちの西側への続きの状況を確認するため、約 3.0 × 1.5 m のトレンチを設定した（第 21 図、図版 2 － 6 ・ 7）。トレンチ内ではアカホヤ面からの段は確認できなかった。

トレンチの表土から、須恵器片が 1 点出土している。

9 トレンチ

墳丘西側での段の続きを確認するため、約 2.2 × 1.5 m のトレンチを設定した（第 22 図、図版 14 － 1 ・ 2）。

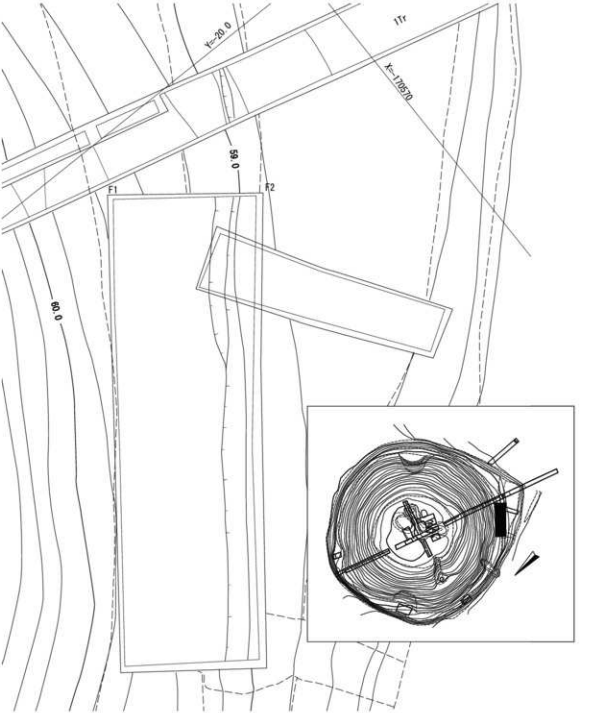
トレンチ内では、アカホヤ面での段を確認することができた。段は、ローム層までは及ばず、アカホヤ面までの掘削にとどまる。削平により段の形状についての詳細を把握することは困難である。

11 トレンチ

1 トレンチで検出されたアカホヤ面から掘り込まれた段が、周溝として続くかどうかを確認するため、1 トレンチの墳丘裾部の西側に約 7.5 m × 2.5 m のトレンチを設定した（第 23 図、図版 13 － 5 ・ 6）。

層位から、墳丘の裾に沿う形で段が西側に続くことが確認された。外側は削平されており、周溝の南側の立ち上がりは不明であるが、本トレンチで検出された段は墳裾に沿うようにして巡っており、周溝の掘り込みに相当すると推測する。

なお、南西方向に接続する形で 11 トレンチを拡張し掘削したが、削平を受けアカホヤ層下位のローム層が露出しており、墳丘や周溝の痕跡は確認できなかった。



1 10YR3/1　黒色シルト質砂　表土
2 7.5YR2/1　黒色シルト質砂　しまり　粘性弱い　流土
3 7.5YR2/1　黒色シルト質砂　しまり弱い　やや粘性あり　アカホヤブロック少量含む
A 池田降下軽石層
B アカホヤ層

第 23 図　11 トレンチ　平面・土層図

3　埋葬施設の構造

埋葬施設に関する手掛かりを得るために、2次調査において墳頂部の平坦部をほぼカバーするように、長さ約10.5 m、幅 1.0 mの3トレンチを設定した（第24図）。

表土から掘り下げを行ったところ、複数の攪乱と盗掘坑が確認され、攪乱部分を除去することにより、埋葬施設の手掛かりが得られるであろうという見通しで掘り下げを進めた。

3次調査時には3トレンチに直交して、西側に5トレンチ、東側に6トレンチを設定して、埋葬施設の手掛かりを得ることを目指した。

盗掘に関わる攪乱は、石室の大半を破壊する大規模なものであり、3トレンチ層位の切りあいから、少なくとも2回盗掘が及んだことが推測される。

より大規模な攪乱の方が古く、その上部には、大正火山灰が中央部に向かって下に傾斜した状態で堆積しており、大正3（1914）年よりも前に受けた攪乱であることを示唆する。

また、3トレンチ北寄りの層位では大正火山灰が見られないことから、大正3（1914）年以降にも攪乱を受けたことを示唆すると判断される。

攪乱の規模が大きいため、その後の調査でも埋葬施設や墓壙ラインの確認ができない状況が続いた。大型の石材は、墳頂部に露出したものがあり、また3トレンチ掘り下げ時にも確認されていたが、トレンチ下部で小型の石材が一定量確認されたのは3次調査が初めてであった。しかし、人為的に石室を構築した状況にはみえず、石が原位置を保っているとは考えられなかった（図版11－2）。

4次調査では、6トレンチからも石材が確認され、まとまって検出されたものについては原位置を保っていると推定した。しかしながら後の調査で、これらは盗掘・破壊後に投げ込まれたものであることが明らかになった。

また墓壙を確認するため、6トレンチの南側に10トレンチを設定した。10トレンチでは、天井石が露出し、表土下に盛土があらわれる一方、埋葬施設にともなう盗掘坑の検出は困難とみて、盛土が検出された時点で一旦掘削を中止した。

5次調査では、12トレンチで墓壙とみられるラインを確認できた（第25図、図版11－1）。また、盗掘坑の範囲や形は、石室のおおまかな範囲や方向を反映していると考えられ、6トレンチや10トレンチ拡張部の盗掘ラインは、石室の範囲や向きをある程度示していといえよう。

6次調査では、埋葬施設に関連する石材を検討し、3トレンチの北側と南側に石室の原位置を留める石材が一部残存することを確認した。また、凝灰岩片を含む床面とみられる層についても認識することができ、石室の構造や構築法の一端を見出すことができたが、盗掘と攪乱は床面全体に及び、さらに下方に続くことから完掘には至らなかった（第26図）。以下では、各トレンチの状況を述べたい。

3トレンチ

墳丘頂部の南北方向に約16.8 × 1.0 mのトレンチを設定した（第27図）。埋葬施設は盗掘を受け、墳頂部には盗掘や複数の攪乱のライン、大型石材の露出が認められる（図版9－1・2・3）。トレンチ上層からは、遺物も比較的多く出土している。

埋葬施設を構成する墓壙の把握のため、主体部近くの北側にサブトレンチを設定し構築方法や墓壙を検討した。

3トレンチの北寄りで盛土の単位が異なることを平面的に確認し、東側に12トレンチを設けてその単位の続きを追いかけたところ、すぐに直角に折れ曲がり調査区外（南側）に延びることがわかった（図版11－1）。

埋葬施設は、全体に大きく盗掘による攪乱を受けており、石室等の状況は不明な点が多い。一方、下部にはわずかに石室の石積みの一端を残している。

トレンチ表土層は、木の根の攪乱がみられ、表土下の5層～10層までは、盗掘や攪乱にともなう層であると考えられる。

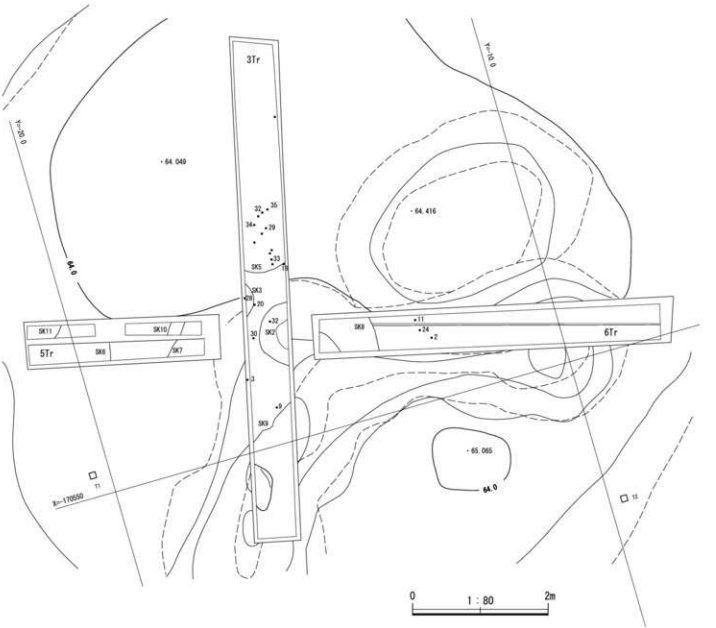
トレンチの南側で大正火山灰とみられる層が検出されており、中心に向かって傾斜した層位を示すことから、南側付近では大正火山灰の降下以前に攪乱を受け、火山灰の堆積以後は大きく攪乱されていないことがうかがえる。一方、北側では大正火山灰の堆積が明瞭に確認できず、火山灰の堆積以後に攪乱を受けたことを示す可能性がある。

盛土は主に粘性のあるシルト質砂で、アカホヤ層やローム層のブロックを含む。盛土の一単位の厚さは、15～30cmほどで、トレンチ南側では盛土上部は攪乱を受けており、構築方法は判然としないが、11・12・13・14層は黒褐色～暗褐色シルトで盛土を構築している。

北側はオリーブ褐色あるいは黒褐色シルトでアカホヤブロックやロームブロックを含み、粘性があり固くしまる土が主体を占める。

墳丘盛土の層位をみると、14層から19層は隣接する20層から28層と堆積状況が整合せず、石室構築のために墓壙として盛土を掘削した後に、石室構築後に裏込め土を充填したことを示す可能性がある。また床面近くには石室石材として原位置を留めるとみられる砂岩が検出され（図版10－5、11－3）、14～19層は石室の裏込め土と推測する。

29・30層は、凝灰岩礫の砕片を含む層で、ゆるやかに中心が低く落ちるレンズ状の層位が観察される（図版11－4）。この29・30層は、石室壁とみられる砂岩礫



第 24 図　3 次調査（2015 年）時点での墳頂部トレンチ設定と遺物出土状況

の下に続き（図版 11 －3・4）、6 トレンチでも同様な層位が確認され、盗掘による攪乱を受けた層とは考えにくいことから、石室の床面の層に相当するとみられる。

29・30 層に含まれる凝灰岩礫は、破砕された状況であることから、凝灰岩製の石棺を削り出した際の凝灰岩の残滓が堆積した可能性もある。また 29・30 層は、石室壁とみられる砂岩礫の下にも続いていることから、凝灰岩製の石棺構築後に、石室の壁を構築したようである。

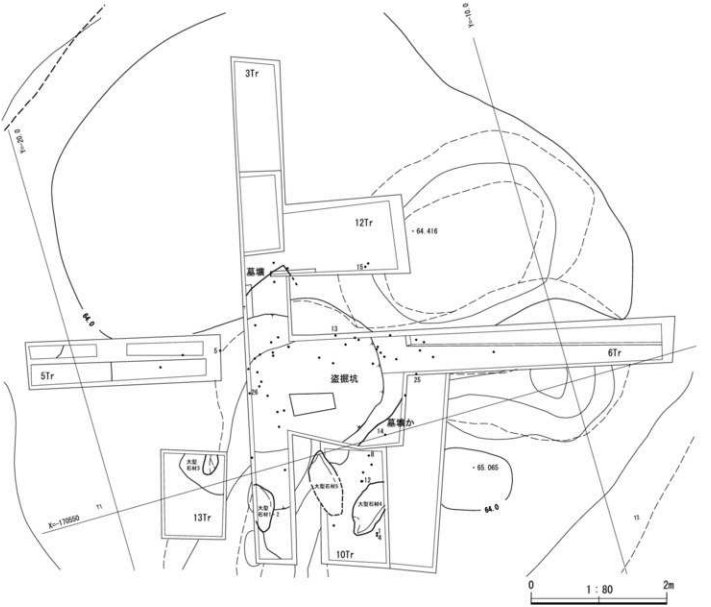
凝灰岩を含む層の下の 32 層は、アカホヤ層土を多く含む黒色粘質土で、固くしまる。32 層は 26 ～ 28 層とも類似しており、この黒色粘質土層は 4 トレンチの 24 層でも検出されたことから、墳丘盛土の基盤の一つであった可能性が高い。また、この黒色粘質土層が南側では上に盛り上げられることによって（26 ～ 28 層）、29・30 層の凝灰岩礫の砕片を含む層がレンズ状に堆積することにつながっているとみられる点にも注目したい。

トレンチ内からは、須恵器片や土師器片、鉄器など 40 点程認められているが、主に 1 ～ 6 層と土坑から出土したものである。これら遺物は、盗掘坑や攪乱土坑、および表土付近での攪乱後に形成された層から出土したと判断され、古墳築造当時の原位置をとどめるものではない。

5 トレンチ

墳丘頂部の西側の東西方向に約 4.1 × 1.0 m のトレンチを設定した（第 28 図、図版 12 － 1）。

表土から 30 cmほどで盛土に達したため、南側に 0.5



第 25 図　6 次調査（2021 年）時点での墳頂部トレンチ設定と遺物出土状況

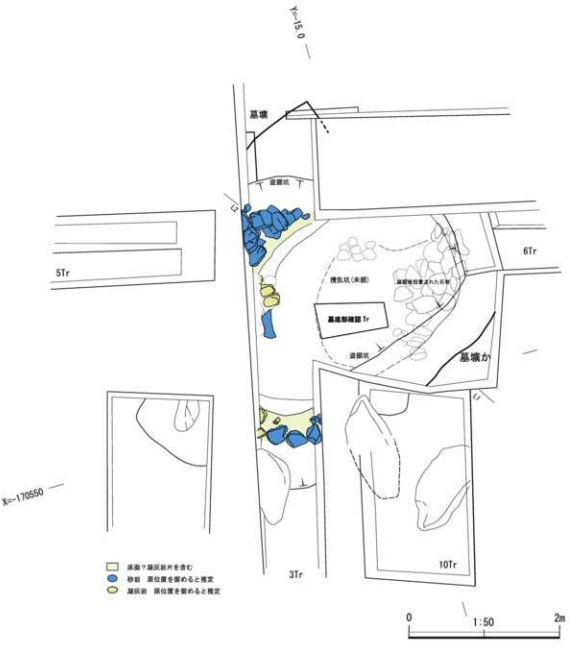
mのベルトを残し、北側にサブトレンチを設定して墳丘盛土の層位の確認を行った。

トレンチ東側上層は、盗掘により削平され、盗掘にともなう攪乱層埋土の層位は東に向かって落ちている。2～5層は、表土層付近および盗掘にともなう攪乱層と考えられる。

盛土は、一単位が 20 ～ 30cm ほどの厚さで、層位から西側に盛土を積んで高まりを設けた後に、東側に向かって土を積んだことが推測される。トレンチ西側の 15・16 層は、厚みが 40cm ほどあり、固くしまり粘性を帯びており、周堤状に西側に盛土を先行して構築した可能性がある（図版 12 － 2）。また 14 層は 15 ～ 18 層とともに先行して構築され、その間を充填するように主体部に向かって盛土が構築されたようである。

墳丘の保護の観点から、盛土の掘削は表土から 1.1 m ほどにとどめたため、墓壙や主体部に関する手がかりを得ることはできていないが、他のトレンチで検出された主体部深くに及ぶ盗掘坑が本トレンチ東側の端部でみられることから、墓壙はトレンチ東側付近に存在すると推測する。

トレンチ内から、須恵器片が 3 点出土しているものの、攪乱後に堆積した 3・4 層からであり、古墳築造当時の原位置をとどめるものではない。



第 26 図　主体部石材等検出状況

6 トレンチ

墳丘頂部の東側の東西方向に 6 トレンチを設定した（第 29 図、図版 10 －１・２・３）。

表土から 20 ～ 30cm ほどで盛土面に達したため、北側にサブトレンチを設定して、墳丘盛土の層位の確認を行った。

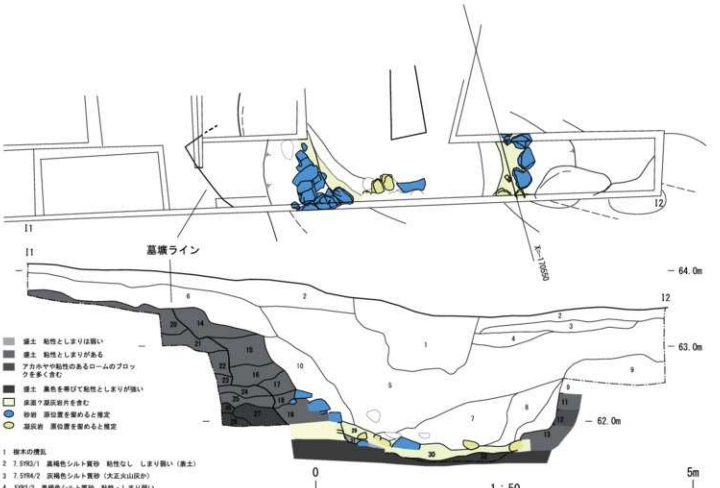
6 トレンチも、主体部付近は大きく盗掘を受け、石室の構造の詳細は把握しえないが、床面と墳丘盛土の層位から、ある程度墳丘と埋葬施設の構築過程を推測できた。

墳丘の上部は攪乱を受けているが、残存する盛土の堆積を観察すると、粘性のある黒褐色～暗褐色シルト質砂で、アカホヤブロックやロームブロックを含む。また下層の方がアカホヤブロックやロームブロックを多く含み、固くしまる傾向がある。

トレンチ東側は、盛土の単位が広く、西側の 5 トレンチと同様に周堤状に先行して東側に盛土を構築した可能性もある（図版 10 －１）。

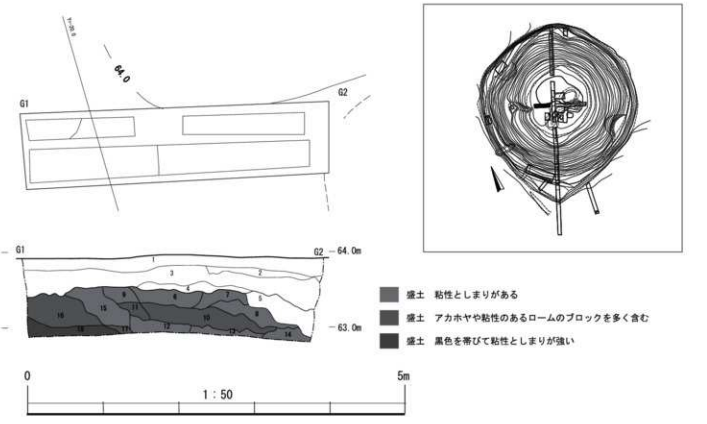
埋葬施設は、盗掘による破壊が著しく詳細は把握できないが、21 層は 3 トレンチの 29・30 層に相当し、凝灰岩片を含むことから、石室床面に相当すると考えられる。ただし床面も攪乱を受けているとみられ、石室の構築状況は判然としない。

また 23 ～ 26 層は、27 ～ 29 層と堆積状況が整合しないことから、墳丘盛土を構築後に墓壙を掘削したことを示



1　樹木の撹乱
2　7.5YR3/1　黒褐色シルト質砂　粘性なし　しまり弱い（表土）
3　7.5YR4/2　灰褐色シルト質砂（大正火山灰か）
4　5YR2/2　黒褐色シルト質砂　粘性・しまり弱い
5　7.5YR3/3　暗褐色シルト質砂　粘性なし　しまり弱い（カクラン、盗掘に伴う層）
6　7.5YR3/1　黒褐色シルト質砂　粘性・しまり弱い
7　2.5YR2/2　黒褐色シルト質砂　粘性あり　しまり弱い（盗掘に伴う層）
8　7.5YR2/2　黒褐色シルト質砂　粘性あり　しまり弱い　アカホヤブロックを少量含む
9　7.5YR2/2　黒褐色シルト質砂　粘性あり　しまり弱い　アカホヤブロックを少量含む（撹乱）
10　10YR2/2　黒褐色シルト質砂　粘性・しまり弱い　盗掘に伴う層
11　7.5YR2/3　極暗褐色シルト質砂　粘性あり　しまり弱い　ロームブロック、アカホヤブロックを少量含む　盛土
12　10YR2/2　黒褐色シルト質砂　粘性あり　しまり弱い　ロームブロック多く含む　盛土
13　10YR2/1　黒褐色シルト　粘性強い　しまりあり　盛土
14　7.5YR3/3　暗褐色シルト質砂　粘性弱い　しまりあり　盛土
15　2.5Y3/3　オリーブ褐色シルト質砂　粘性ややあり　しまりあり　ロームブロック・アカホヤ少量含む　盛土
16　2.5Y3/3　オリーブ褐色シルト質砂　粘性ややあり　しまりあり　ロームブロックを少量含む　盛土
17　7.5YR2/1　黒色シルト質砂　粘性・しまりあり　ロームブロック・アカホヤブロックを少量含む
18　2.5Y4/6　オリーブ褐色シルト　粘性あり　しまりあり　盛土
19　2.5Y2/1　黒褐色シルト　粘性あり　よくしまる　アカホヤブロックを少量含む　盛土
20　10YR2/2　黒褐色シルト質砂　粘性・しまりあり　盛土
21　2.5Y4/4　オリーブ褐色シルト　粘性あり　よくしまる　アカホヤブロックを少量含む　盛土
22　2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト+2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルト質砂ブロック　粘性あり　よくしまる　盛土
23　10Y3/3　暗褐色シルト+10YR6/4　褐色シルト質砂　粘性あり　よくしまる　盛土
24　10YR2/1　黒色シルト+10YR2.5/8　黄褐色シルト質砂　粘性あり　よくしまる　盛土
25　10YR2/1　黒色シルト+10YR2.5/8　黄褐色シルト質砂（23層より少ない）粘性あり　よくしまる　盛土
26　10YR2/1　黒色シルト　アカホヤブロックを少量含む　盛土
27　2.5Y2/1　黒色粘質シルト　粘性あり　よくしまる　アカホヤブロックをやや多く含む　盛土
28　2.5Y2/1　黒色粘質シルト　粘性あり　よくしまる　アカホヤブロックを少量含む　盛土
29　7.5YR2/1　黒色シルト　粘性あり　よくしまる　凝灰岩片少量含む（盛土か）
30　10YR3/1　黒褐色シルト質砂　凝灰岩礫・砂質じり　粘性ややあり　しまり弱い（石室床面？）
31　7.5YR2/1　黒色シルト質砂　しまりあり　粘性やや弱い（盛土か）
32　7.5YR2/1　黒色粘質シルト　粘性強い　よくしまる　アカホヤブロックを多く含む

第27図　3トレンチ　平面・土層図（原図を反転して作成）



1　7.5YR2/3　極暗褐色シルト質砂　粘性なし　しまりなし（表土）
2　7.5YR1.7/1　黒色シルト質砂　粘性なし　しまりなし　大正火山灰を少量含む
3　10YR7/1　黒色シルト質砂　しまり弱い
4　10YR2/1　黒色シルト質砂　しまり弱い
5　7.5YR3/3　暗褐色シルト質砂　しまり弱い　アカホヤ、ローム粒子を少量含む（盗掘にともなう埋土）
6　5YR2/2　黒褐色シルト質砂　しまり弱い　アカホヤ、ローム粒子を少量含む（盛土）
7　5YR2/2　黒褐色粘質シルト　しまりあり　粘性あり　アカホヤ、ロームブロックを少量含む（盛土）
8　7.5YR2/2　黒褐色粘質シルト　しまりあり　粘性あり　アカホヤ、ロームブロックをわずかに含む（盛土）
9　7.5YR7/1　黒色粘質シルト　よくしまる　粘性あり　アカホヤブロックをわずかに含む（盛土）
10　10YR3/3　極暗褐色粘質シルト　しまりあり　粘性あり　大粒のアカホヤブロック、ロームブロックを多く含む（盛土）
11　10YR2/1　黒色粘質シルト　よくしまる　粘性あり　大粒のアカホヤブロックを多く含む（盛土）
12　7.5YR7/1　黒色粘質シルト　しまりあり　粘性あり　アカホヤブロックを少量含む（盛土）
13　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　しまりあり　粘性あり　アカホヤとロームブロックをわずかに含む（盛土）
14　10YR3/3　暗褐色粘質シルト　しまりあり　粘性あり　アカホヤとロームブロックを少量含む（盛土）
15　10YR1.7/1　黒色粘質シルト　しまりあり　粘性あり　大粒のアカホヤブロックをわずかに含む（盛土）
16　黒褐色粘質シルト　よくしまる　粘性あり　大粒のアカホヤブロックとロームを多く含む（盛土）
17　10YR1.7/1　黒色粘質シルト　よくしまる　粘性あり　アカホヤブロックを多く含む（盛土）
18　10YR2/2　黒褐色粘土　よくしまる　粘性強い　アカホヤブロックを少量含む（盛土）

第 28 図　5 トレンチ　平面・土層図

す可能性がある。23 ～ 26 層は、位置的に石室壁を設置するための裏込め土に相当するとみられる（図版 10 － 2）。

40 層は、3 トレンチの 32 層に相当し、黒色粘質土で固くしまる。墳丘盛土の基盤層の一つであると推測する。

トレンチ内から須恵器片や土師器片が 20 点程出土しているものの、表土層や攪乱を受けた後に形成された層（9 層）、そして盗掘坑埋土内から出土したものであり、古墳築造当時の原位置をとどめるものではない。

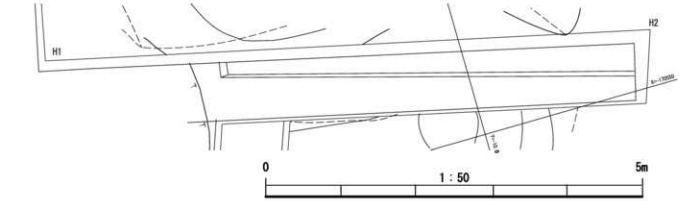
10 トレンチ

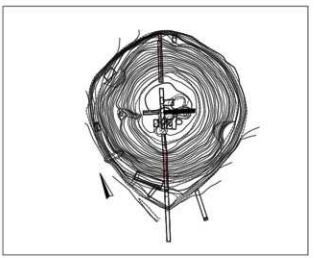
石室内の埋葬施設の状況、および墓壙の把握のため約 3.0 × 1.5 m のトレンチを 3 トレンチ東側に設定した（図版 11 － 6）。

10 トレンチでは、盛土を掘り込んだ盗掘ラインが検出されたため、拡張し盗掘坑の埋土を除去しつつ掘り進めた。トレンチの下部では、盗掘で攪乱されて石が投棄された状況が検出され、本来の石室などの施設の状況を把握するのは困難であった。

トレンチ内で大型石材が露出しており、盗掘時に石室から取り外し、墳頂部に置かれたことを示す。

10 トレンチ南側では、盛土が残存しているが、北側拡張部では盗掘によって大きく攪乱を受けている。攪乱層に堆積した土の上層には大正火山灰とみられる粒子が含まれており、大正火山灰の降下以前の盗掘とみられる。盛土は、拡張部では黒色粘質土が堆積した状況が確認された。





盛土　粘性としまりは弱い
盛土　粘性としまりがある
盛土　アカホヤや粘性のあるロームのブロックを多く含む
盛土　黒色を帯びて粘性としまりが強い
床面？凝灰岩片を含む
砂岩　原位置を留めると推定
凝灰岩　原位置を留めると推定

1 表土
2 10YR2/2　黒褐色シルト質砂　粘性・しまりなし
3 10YR4/1　灰褐色砂　粘性・しまりなし（大正火山灰層か）
4 10YR2/1　黒色シルト質砂　粘性・しまり弱い
5 10YR2/2　黒色シルト質砂　粘性・しまり弱い
6 10YR2/1　黒色シルト質砂　粘性ややあり　しまり弱い
7 10YR2/2　黒色シルト質砂　粘性弱い　しまり弱い
8 10YR2/2　黒色シルト質砂　粘性弱い　しまり弱い（カクラン層）
9 10YR2/2　黒色シルト質砂　粘性弱い　しまり弱い
10 7.5YR3/1　黒褐色シルト質砂　粘性・しまり弱い（墓壊に伴う層）
11 7.5YR3/2　黒褐色シルト質砂　粘性・しまりややあり　凝灰岩片、頂部瓦片を含む
12 7.5YR3/2　黒褐色シルト質砂　粘性・しまりややあり
13 10YR3/4　暗褐色シルト質砂　粘性弱い　しまりあり　ロームブロック多く含む　盛土
14 10YR3/4　暗褐色シルト質砂　粘性弱い　しまりあり　アカホヤブロック、ロームブロックわずかに含む　盛土
15 7.5YR3/4　暗褐色シルト質砂　粘性・しまり弱い　アカホヤブロック、ロームブロックわずかに含む　墳丘盛土
16 7.5YR2/2　黒褐色シルト質砂　粘性あり、よくしまる　アカホヤブロック、大粒のロームブロック多く含む　盛土
17 2.5YZ/3　黒色シルト質砂　粘性・しまりあり　墳丘盛土
18 10YR3/4　暗褐色シルト質砂　粘性・しまり弱い　アカホヤブロック少量含む　盛土
19 10YR2/1　黒色シルト質砂　粘性・しまりあり　アカホヤブロック、大粒のロームブロック多く含む　盛土
20 10YR3/2　暗褐色シルト質砂　粘性あり、よくしまる　アカホヤブロック少量含む　盛土
21 10YR4/2　灰黄褐色シルト質砂　粘性・しまりややあり　凝灰岩片少量含む　丘盛土（石室床面？）
22 10YR3/2　黒褐色シルト質砂　粘性・しまりやや弱い　砂岩・凝灰岩片少量含む　盛土
23 7.5YR3/2　黒褐色シルト質砂　粘性・しまりあり　アカホヤ・ロームブロックをやや多く含む　盛土
24 7.5YR2/2　黒褐色シルト質砂　粘性・しまりあり　アカホヤ・ブロックを少量含む　盛土
25 5YR3/2　暗赤褐色粘質シルト　粘性・しまり強い　アカホヤ多く含む　墳丘盛土
26 7.5YR3/3　暗褐色粘質シルト　粘性強い　よくしまる　アカホヤ・ロームブロック少量含む　盛土
27 10YR2/2　黒褐色シルト質砂　粘性・しまりあり　アカホヤ・ロームブロックやや多く含む　盛土
28 7.5YR3/2　黒褐色粘質シルト　粘性強い　よくしまる　盛土
29 7.5YR3/3　黒褐色粘質シルト　粘性強い　よくしまる　盛土
30 7.5YR2/1　黒色粘質シルト　粘性・しまり強い　アカホヤ・ロームブロック多く含む　盛土
31 10YR2/2　黒褐色シルト質砂　粘性・しまり弱い　墳丘盛土
32 10YR2/1　黒色粘質シルト　粘性・しまり強い　アカホヤブロック多く含む　盛土
33 7.5YR2/2　黒色粘質シルト　粘性あり　しまり弱い　盛土
34 10YR2/3　黒褐色シルト質砂　粘性弱い　しまりあり　アカホヤブロック少量含む　盛土
35 7.5YR2/2　黒褐色シルト質砂　粘性・しまりあり　アカホヤブロック、ロームブロック少量含む　盛土
36 2.5YZ/1　黒色シルト質砂　粘性弱い　しまりあり　アカホヤブロック、ロームブロック少量含む　盛土
37 10YR2/2　黒褐色シルト質砂　粘性弱い　しまりあり　アカホヤブロック、ロームブロック少量含む　盛土
38 7.5YR2/1　黒色シルト質砂　粘性・しまりあり　アカホヤブロック、ロームブロック多く含む　墳丘盛土
39 10YR1.7/1　黒色シルト質砂　粘性・しまり弱い　墳丘盛土
40 10YR2/2　黒色粘質シルト　粘性強い　固くしまる　アカホヤブロック多量　盛土

第 29 図　6 トレンチ　平面・土層図

第 30 図　10 トレンチ及び主体部床面断面図
（一部原図を反転して作成）

10 トレンチ拡張部で検出された盛土の断面を観察すると、盗掘により石室の石材を抜き取るためオーバーハングされた状況が確認された（第 30 図）。また盛土を掘り込む盗掘ラインは、北東から南西方向に検出された。

石室の石材を抜き取った盗掘ラインは、ある程度石室の規模や範囲を反映している可能性が高く、石室が北東から南西方向の向きに構築されたことを示唆する。さらに盗掘坑ラインの外側（東側）に盛土の単位の境界が検出され、墓壙の可能性がある（図版 11 －8）。

盛土の下層は、3 トレンチの 32 層や 6 トレンチの 40 層に相当する黒色粘質土であり、この層は東に向かって上に傾斜する点にも注意される。

なお、10 トレンチ東側の拡張部と 6 トレンチの間の盛土上位からは、土師器の高坏脚部片が出土しており（第 38 図 25）、墳丘構築時の祭祀行為を示すかもしれない。

また トレンチの表土下位の黒色土層から、須恵器片や土師器片が 9 点出土しているものの、攪乱を受けた後に形成された層（3 トレンチ 6 層相当）から出土したもので、古墳築造当時の原位置をとどめるものではない。

基底部確認トレンチ

3 トレンチ及び 6 トレンチ、10 トレンチの底面には、砂岩や凝灰岩の礫が石室の原位置を留めない状況で検出され（図版 11 －2）、礫を取り除くと、盗掘時の床面が現れた。

そこで、埋葬施設が下に残存するかどうかを確かめるため、基底部確認トレンチを設定し 70 ㎝ほど掘削したが、盗掘にともなう攪乱は下に続いていた。

トレンチ壁面に残る墳丘盛土面は、3 トレンチの 32 層や 6 トレンチの 40 層に相当する黒色粘質土である。

攪乱は床面に広がり（第 26 図）、10 トレンチ拡張部まで続いている。埋土からはイネ科の植物片が含まれており、比較的新しい時期に建造物などによる攪乱を受けた可能性がある。墳丘保護の観点から、攪乱は全掘せずに盛土を確認した時点で掘削を止めた。

12 トレンチ

埋葬施設構築時の墓壙を確認するため、墳頂部北東部に約 2.0 × 1.8 m のトレンチを設定した（第 31 図）。

南側壁では、表土から 30 ㎝ほどで盛土面に達した。12 トレンチ付近は他の墳頂部トレンチに比べて標高が高く、盛土は攪乱を受けず比較的墳丘の構築時の状況を残している可能性がある。

南壁の 6 層は、黒色のシルト質層であるが、表土層および攪乱後に堆積した層と、盛土層にはさまれた層位を示しており、墳丘の旧地表面の一部の可能性がある。

盛土は黒褐色～オリーブ褐色のシルト質砂で、粘性としまりがあり、アカホヤ層土とロームブロックを含む。

盛土の堆積状況から、東側から 12・22・23 層の盛土の高まりを構築し、19 層の高まりを形成した後に、間を充填して盛土を積んだことが推測される。また 10・14・15・17・18 層と、9・16 層の堆積状況は整合しないことから、墓壙構築の痕跡の可能性がある（図版 12 －5）。

トレンチの西側下部において、墓壙についての検討を行ったところ、墓壙とみられる掘り込みを平面的に確認できた。そして、それが 3 トレンチと 6 トレンチにつながることが想定された。

トレンチ内から須恵器が 2 点出土しているものの、攪乱後に堆積した層（4 層）からの出土であり、墳丘構築当時の原位置をとどめるものではない。

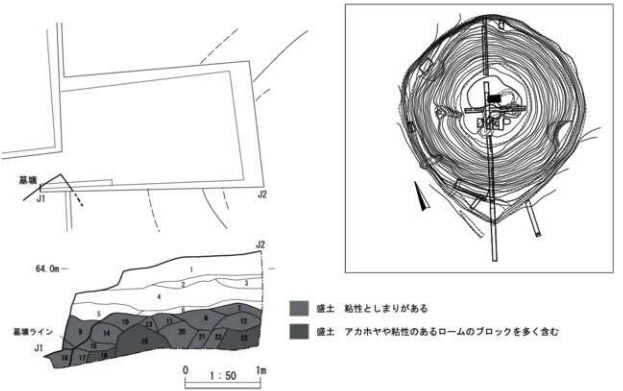
13 トレンチ

墓壙および主体部の確認のため、墳丘頂部の南西部に約 2.0 × 1.3 m のトレンチを設定した（第 32 図、図版 12 －3・4）。

トレンチの南東部および北東部からは、盗掘による攪乱の掘り込みを確認した。盛土は比較的細かく構築し、縦長に積まれた盛土もみられる一方、下層では比較的フラットに盛土を積んでいる状況が確認できた。

最下層の 11 層は、黒色を帯びて固くしまる粘質土層で、3 トレンチの 32 層や 6 トレンチの 40 層に相当する可能性がある。

墳丘の保護の観点から、盛土の掘削は表土から 1.4 m ほどにとどめたため、墓壙や埋葬施設に関する手がかりを得ることはできなかったものの、盗掘坑とみられる攪乱が北東部で検出されたことから、攪乱は埋葬施設の端部の位置を示しているかもしれない。



1　10YR2/1 黒色シルト質砂　しまり・粘性弱い　アカホヤブロックを少量含む（表土）
2　10YR3/2　黒褐色シルト質砂　しまり・粘性弱い（大正火山灰か）
3　10YR2/1　黒色シルト質砂　しまり・粘性弱い
4　10YR2/2　黒褐色シルト質砂　しまり弱い　粘性ややあり
5　10YR2/3　黒褐色シルト質砂　しまり・粘性弱い（塁線状にともなうものか）
6　10YR2/1　黒色シルト質砂　しまりと粘性ややあり（後丘田農土か）
7　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルト質砂　しまり・粘性ややあり　アカホヤブロックを少量含む　盛土
8　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルト質砂　しまり・粘性ややあり　盛土
9　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルト質砂　しまり・粘性ややあり　ロームブロックを少量含む　盛土
10　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルト質砂　しまり・粘性弱い　盛土
11　2.5Y3/2　黒褐色シルト質砂　しまり・粘性ややあり　アカホヤブロックを少量含む　盛土
12　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルト質砂　しまり・粘性あり　アカホヤブロックを少量含む　盛土
13　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルト質砂　しまり・粘性あり　アカホヤブロックを少量含む　盛土
14　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルト質砂　しまり・粘性あり　ロームブロックを少量含む　盛土
15　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルト質砂　しまり・粘性あり　ロームブロックを少量含む　盛土
16　2.5Y3/1　黒褐色シルト質砂　しまり・粘性あり　アカホヤブロックを少量含む　盛土
17　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルト質砂　しまり・粘性あり　ロームブロックを少量含む　盛土
18　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルト質砂　しまり・粘性ややあり　アカホヤとロームブロックをやや多く含む　盛土
19　2.5Y3/2　黒褐色シルト質砂　しまり・粘性弱い　アカホヤとロームブロックをやや多く含む　盛土
20　2.5Y3/2　黒褐色シルト質砂　しまり・粘性あり　アカホヤとロームブロックを少量含む　盛土
21　2.5Y3/1　黒褐色シルト質砂　しまり・粘性あり　ロームブロックをわずかに含む　盛土
22　2.5Y3/2　黒褐色シルト質砂　しまり・粘性あり　ロームブロックを少量含む
23　2.5Y3/1　黒褐色シルト質砂　しまり・粘性ややあり　アカホヤブロックを多く含む

第31図　12トレンチ　平面・土層図（原図を反転して作成）

4　石材の検討

発掘調査開始以前から、何枚かの大型石材が墳丘上に露出していたが、3トレンチや13トレンチを掘り下げる過程で検出したものもある。

大型の石材は5点確認している（第33・34図、図版14－3～6）。これらの大型石材について検討しておきたい。

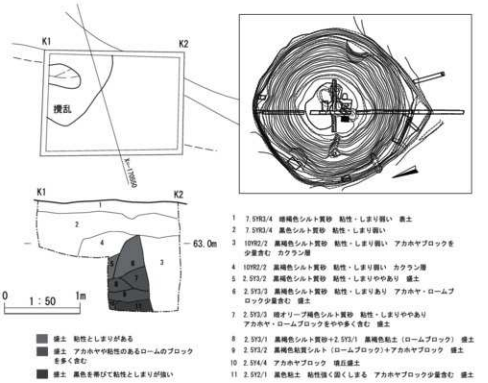
No. 1は3トレンチから出土した。残存部分の長さ約47㎝、最大部の幅約32㎝、厚さ約20㎝である。上面は平坦で、片方の端部に向かって厚みを増している。

No. 2はNo. 1と接合する個体で、残存部分の長さ約83㎝あることから、もともとは長さが約130㎝あったことになる。幅約51㎝、厚さ約23㎝、上面は平坦で、片方の端部に向かって厚みを増している。

No. 3は13トレンチで検出したもので、トレンチ外にも続いている。13トレンチ内に露出した長さは約47㎝、幅約26㎝、厚さは16㎝以上あり、厚みはほぼ均等で側面は平坦に整えられているようにみえる。

No. 4は当初から墳頂部に露出していたものである。確認のため、端部を露出させた。長さ約186㎝、幅約80㎝、厚さ約38㎝あり、確認した大型石材の中では最大である。上面・下面とも平坦で、厚さはほぼ均一である。側面は鼓打によって形を整えているようにもみえる。

No. 5は、長さ約112㎝、幅約52㎝、厚さ約21㎝である。上面・下面および側面は平坦で、厚さはどの部分もほぼ均一である。



第 32 図　13 トレンチ　平面・土層図

これらの大型石材はいずれも砂岩で、上面や下面、側面に平坦面を有することや厚みがほぼ均一なものがみられることから、ある程度の加工が施されたものであると判断できる。これらは埋葬施設の材の一部であることは確実である。

後述するように、小型の砂岩製石材は大きさや数量からみて、埋葬施設の壁や裏込めに用いられたと判断できる。それに対して大型石材は、埋葬施設の天井に用いられた蓋然性が高い。

次に、3 トレンチや 6 トレンチ、10 トレンチ拡張部下部から出土した小型石材は、砂岩と凝灰岩から構成される。小型石材は、多くは攪乱土坑内からの検出であることが判断できたため、盗掘後に投げ込まれたり、詰め込まれたりしたものであろう。

一方、堆積状況や盛土との関係から、先述したように原位置を保った石材もわずかながら認められる。

石材の種類には砂岩と凝灰岩があり、砂岩が圧倒的に多く（図版 14 － 7）、凝灰岩はそれに比べるとかなり少ない（図版 14 － 8）。

攪乱土坑内から取り上げた石材の個数は、小片を除き砂岩が 269 個、小片を含む総重量が 1,462.2kg、凝灰岩は 29 個、小片を含む総重量が 61kg あった。

小型の砂岩製石材には、加工された痕跡は認められない。検出された石材数が多いことから、小型の砂岩製石材は、石室の壁および裏込めに用いられたと判断される。

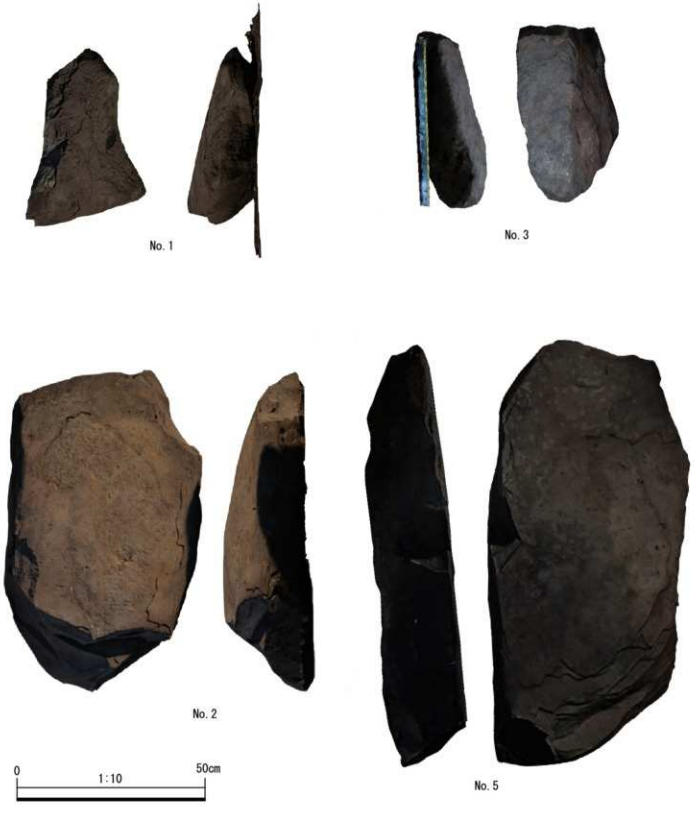
凝灰岩については、非常に軟らかく、石室の壁に用いるには強度的に難しい。また、凝灰岩製の石材は壊れた状態のものが多いが、いくつかには加工した痕跡が確認でき、平坦面や隅を有するように加工されたものもある（図版 16 － 5 ～ 8）。サイズも大きいもので幅約 36 cm、高さ約 28 cm、厚さ約 14 cmあり、砂岩製石材の平均的なサイズのものよりも大きい。

この点から、凝灰岩製石材は組合式石棺に用いられたものであり、盗掘者によって抜き取られたり、壊されたのだろう。

5　墓壙の規模

埋葬施設の形態や規模を検討する上で、墓壙は重要な手がかりとなる。3 トレンチおよび 10 トレンチでは、盛土面に墓壙とみられるラインを検出することができた。また攪乱のラインは、墓壙や石室の範囲をある程度反映すると推測される。

3 トレンチと 10 トレンチの墓壙のラインおよび攪乱のラインから、墓壙は、一辺が 4 ～ 5 m程度の規模になると考えられる（第 35 図）。墓壙や埋葬施設については、第 6 章で改めて論じることにしたい。



第 33 図　墳頂部出土大型石材（№１～３・５）

第 34 図　墳頂部出土大型石材（№４）

第２節　遺物

１　概要

調査で見つかった遺物は 120 点で、古墳時代に属するものと古代に属するものに分別できる。

種類は土師器、須恵器、鉄製品、滑石製品、玉、鉄滓である。その数量は、古墳時代土師器 18 点、古墳時代須恵器 70 点、古代土師器 17 点、時代が判別できない土器片 15 点、鉄製品２点、滑石製品１点、玉１点、鉄滓１点である。

２　須恵器（第 36・37 図１～23）

須恵器は、外面のタタキ調整の観察から少なくとも５個体分（１～15、16、17、18、19～23）が存在するようである。

１～15 は甕で、同一個体である。色調は、外面が灰色を、内面が灰黄色を基調とする。外面がやや赤身を帯びて、にぶい赤褐色を呈するものもある。器肉は灰色を基調とするが、赤身を帯びるものもある。なお、既報（大西ほか 2014）における図 17 －２は、これらと同一個体である。

１・２は口縁部である。外傾し、口縁部上位でさらに傾く形状を呈する。口縁端部がやや凹み、その下に一条のシャープな稜をもつ。外面は横方向のナデ調整を施し、内面は自然釉が掛かる。

３は、「く」字状に屈曲する頸部である。内外面ともに横方向のナデ調整を施す。

４～15 は胴部となる。４～９・12 は外面に灰被りが認められることから、胴部上半と考える。

外面は平行タタキが施され、細沈線が施されるものもある。内面は、同心円状の当て具痕を擦り消しているものの、同心円状の文様は残っている。

出土位置について、７・10 は３トレンチの６層、５は５トレンチの３層、11 は６トレンチの７層、１・４・８・12・14 は 10 トレンチの表土下位の黒色土、15 は 12 トレンチの４層出土、そして２・３・６・９・13 は３・６トレンチの盗掘坑埋土内出土である。

16 は、甕または壺の胴部片である。４トレンチの表土出土である。既報（大西ほか 2014）における図 17 －４に相当する。

外面は、平行タタキが重なっており、一条の細沈線が認められる。また、自然釉が掛かる。内面は、当て具痕が残っていないものの、器面に凹凸が認められることから、当て具痕が擦り消されたと考える。

色調は、外面が灰色を、内面が灰色オリーブを呈する。器肉は赤味を帯びる。

17 は、甕または壺の胴部片である。８トレンチの表土出土である。外面は、平行タタキが施され、その上にカキ目を重ねている。内面は当て具痕が残っていないものの、器面に凹凸がわずかに認められることから、当て具痕が擦り消されたと考える。

色調は、内外面ともに灰色を呈する。器肉がやや白色を呈する。

18 は、甕または壺の胴部片である。３トレンチの６層出土である。既報（大西ほか 2014）における図 17 －１に相当する。

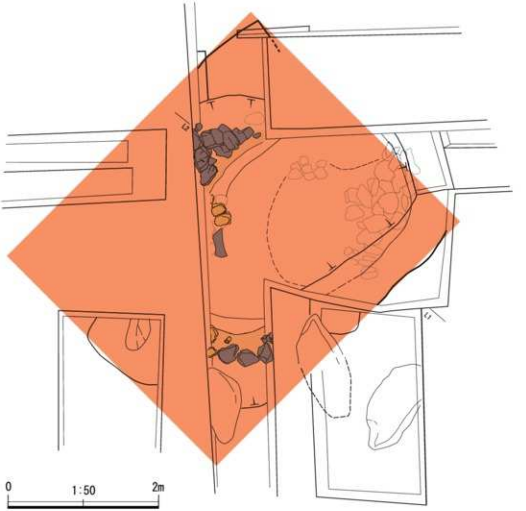
外面は、格子状タタキが施される。内面は当て具痕が残っていないものの、器面に凹凸が認められることから、当て具痕が擦り消されたと考える。

色調は、内外面ともに灰色を呈する。器肉はやや白色を呈する。

19～23 は同一個体で、甕または壺の胴部片である。20・22・23 は底部付近のものである。23 は既報（大西ほか 2014）における図 17 －３に相当する。

外面は、格子状タタキが施される。また自然釉が掛かる。タタキの格子目は 18 のものより大きい。

内面は、20・22 は横方向のナデ調整が施される。21 は同心円状の当て具痕を擦り消しているものの、同心円状の文様は残っている。23 は、上半には横方向のナデ調整が、下半には上下方向のユビナデ調整が施されており、当て具痕は確認できない。



第 35 図　想定される墓壙の範囲

色調は、外面が灰色を基調とし、内面は灰オリーブ色を呈する。器肉はやや赤身を呈する。

出土位置について、20 は墳丘採集、21 は古墳北東部中腹での採集、22 は 7 トレンチ表土、23 は 4 トレンチ表土から出土している。つまり、古墳の北側に偏在していることがうかがえる。

3　土師器（第 38 図 24 ～ 27）

土師器は、高坏、小型壺、小型丸底壺が確認できた。

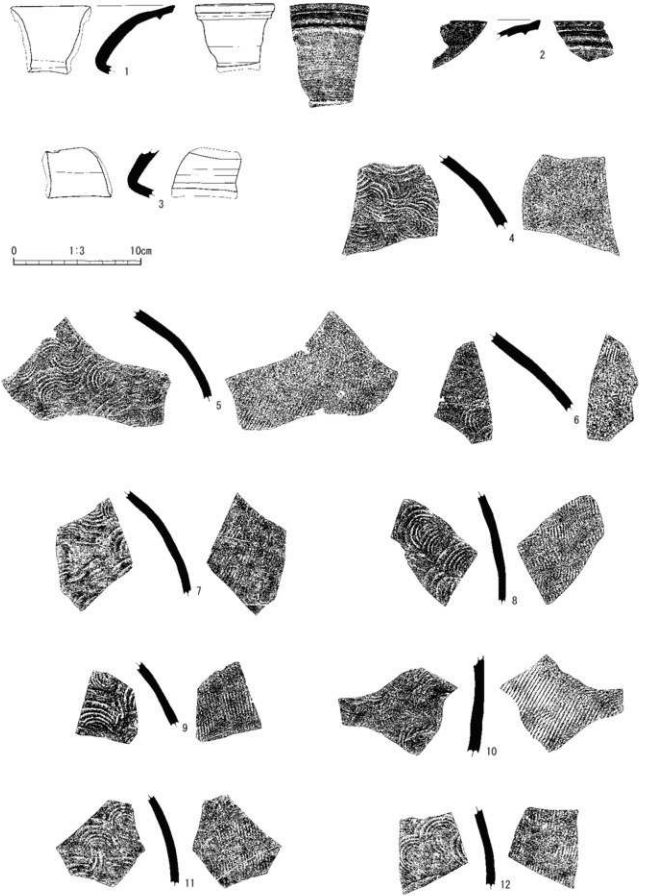
24・25 は同一個体と考えられるもので、高坏である。24 は坏部である。外面は横方向のナデ調整を施す。内面の調整は摩滅のため不明である。色調は内外面ともに橙色を呈する。6 トレンチの 7 層出土である。

25 は脚部である。脚端部でやや屈曲気味に外開きとなる。脚端部に意図的な打ち欠きが認められる。坏部と接合痕で剥離している。脚部径は 11.9 ㎝を測る。前述のとおり、墳丘盛土の上面出土である。

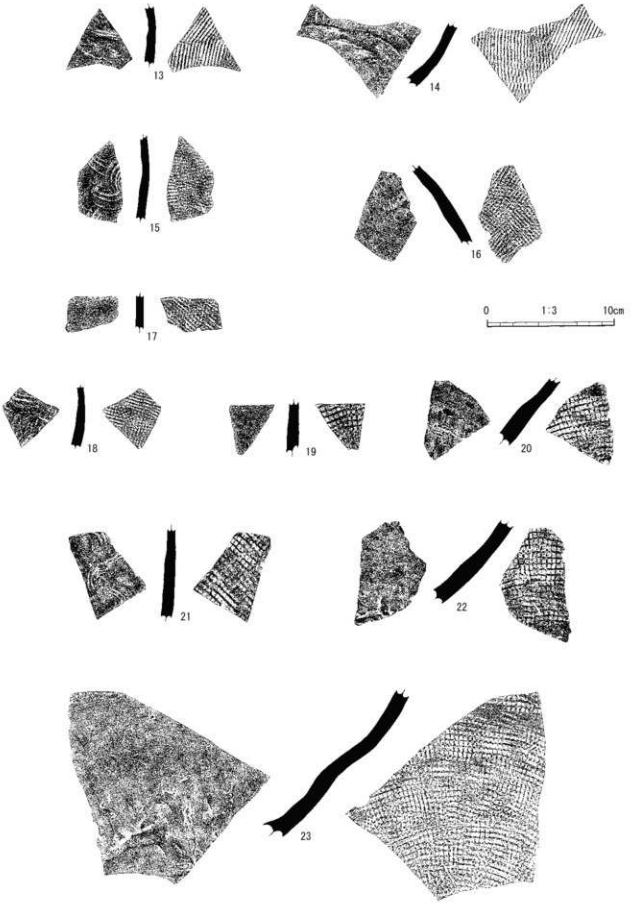
外面は、上位は縦方向のナデ調整を、下位は横方向のナデ調整を施す。内面は、上位は縦方向のナデ調整を、下位は横方向のナデ調整を施す。色調は内外面ともに橙色を呈する。

26 は小型壺の胴部である。外面は横方向のナデ調整を、内面は横方向のナデ調整と一部ユビオサエ調整を施す。色調は、外面が浅黄橙色を、内面が黄橙色を呈する。胎土に砂粒を多く含む。3 トレンチの盗掘坑埋土内出土である。

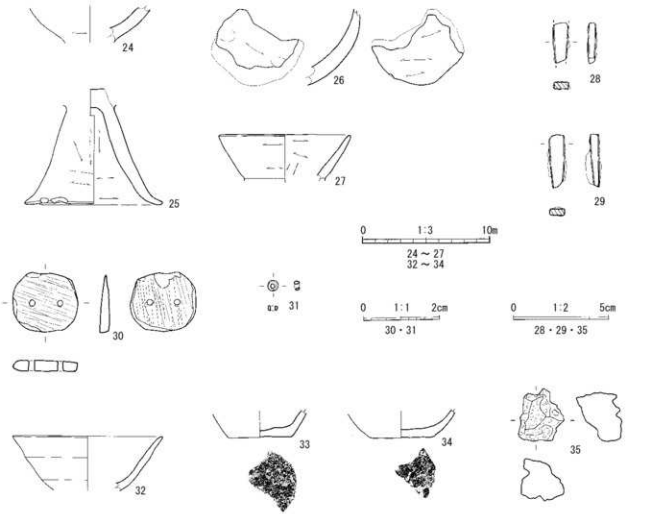
27 は小型丸底壺の外傾する口縁部である。墳丘採集品である。復元口径は 10.5 ㎝、復元頸部径は 6.4 ㎝を測る。外面は横方向のナデ調整を施す。内面は、口縁部上位は横方向のナデ調整を施し、頸部付近には工具の打ち込み痕が残る。色調は、外面がにぶい橙色を、内面がにぶい黄橙色を呈する。内外面の口縁部上位に赤色顔料の痕跡が残る。



第36図　出土遺物（1）



第37図　出土遺物（2）



第38図　出土遺物（3）

4　鉄製品（第38図28・29）

鉄鏃の頸部とみられる破片が確認できた。ともに、下位に向かって幅が狭くなる。

28は、残存長2.2㎝、最大幅0.8㎝、最大厚0.5㎝、重量1.3ｇを測る。3トレンチの盗掘坑埋土内出土である。

29は、残存長2.8㎝、最大幅0.9㎝、最大厚0.45㎝、重量2.6ｇを測る。3トレンチの6層出土である。

5　滑石製品（第38図30）

2つの孔をもつ有孔円板である。3トレンチの盗掘坑埋土内出土である。

長径1.8㎝、短径1.6㎝でやや横長の円形を呈する。短軸方向の厚みは不均一で、三角形状を呈する。最大厚0.25㎝、重さ1.3ｇを測る。孔の直径は1㎜。

両面には、擦痕が認められる。側面も擦っており、面取りがなされる。

6　玉（第38図31）

ガラス玉で、径0.3㎝以下のいわゆる「粟玉」である。5トレンチの表土出土である。

長径0.25㎝、短径0.25㎝、厚さ0.15㎝、重さ0.02ｇを測る。色調は赤褐色を呈する。

実体顕微鏡による観察から、表面は滑らかな質感で、側面には縞状の模様が確認できる。

7　古代土師器（第38図32～34）

古代に属すると考えられる土師器の坏である。32と34は同一個体の可能性が高い。32は3トレンチ盗掘坑埋土内出土、33・34は3トレンチの6層出土である。

32は口縁～体部である。復元口径11.8㎝、現存器高4.3㎝を測る。内外面ともに回転ナデ調整を施す。色調は、内外面ともに橙色を呈する。

33・34は体～底部である。ともに外底面は、回転ヘラ切り痕が認められる。

33は復元底径5.2㎝を測る。外面は回転ナデ調整を記す。内面は、体部が回転ナデ調整を、見込部は不整方向のナデ調整を施す。色調は、外面が明黄褐色を、内面が浅黄橙色を呈する。

34は復元底径5.0㎝を測る。内外面ともに回転ナデ調整を施す。色調は、外面が橙色を、内面が黄橙色を呈する。

8　鉄滓（第38図35）

表面に微細な凸凹のある滓で、表面全体が褐色の錆で覆われている。メタルチェッカーでの反応はみられない。小型の鍛冶滓の可能性がある。最大長2.8㎝、最大幅2.5㎝、最大厚2.3㎝、重量17.2ｇを測る。

3トレンチの6層出土で、古代土師器の近くから見つかっていることもあり、古墳時代のものではない可能性もある。

9　凝灰岩製石材（図版16　5～8）

第1節で前述したように、盗掘坑などから出土した凝灰岩製石材の中には、加工痕が認められるものがあり、15点確認できた。

それらは、面取りがなされたものや工具による切れ込みが認められるものである。面取りは、1面もしくは複数面みられる。

工具による切れ込みは、1つみられるものから複数みられるものまである。また、深い切れ込みもあれば、浅い切れ込みもある。なお、この切れ込みは、古墳築造時のものか、盗掘時のものかは判断できなかった。

加工痕が確認できた石材の中で、残存状況が良好なものを図版に掲載した。以下、個別の説明を行う。

5は、大きさが約40×27×17㎝を測る。上面と下面に面取りがなされている。上面には、直角の段が認められる。

6は、大きさが約25×15×15㎝を測る。上面と向かって左面に面取りがなされており、その2面は直角をなす。工具による複数の切れ込みがみられる。

7は、大きさが約22×15×12㎝を測る。上面と向かって左面に面取りがなされており、その2面は直角をなす。工具による切れ込みが1つみられる。

8の左は、大きさが約19×14×11㎝を測る。上面と向かって右面に面取りがなされており、その2面は直角をなす。向かって右面には、5と同様の直角の段が認められる。

8の右は、大きさが約16×7×6㎝を測る。左面と右面に面取りがなされ、その2面は明瞭な角をもつ。